
なおtoゆう

零・ZA・音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なおもOゆう

【Nコード】

N1273I

【作者名】

零・ZA・音

【あらすじ】

笹山直人は誕生日が五日違いの幼なじみ『藍野悠』と楽しく高校生活を過ごしていた。子供の頃から一緒に遊んでいた仲良しだが、ある日の出来事を期に二人の関係は微妙に変わっていく。思いを遂げるには大きな壁がある。その壁を越えるにはどうしたいのか分からず、年月だけは過ぎていく。ただ、目の前にいる愛しい人を思う気持ちは日増しに強くなるが、その思いは遂げていいのか分からない内に、毎年恒例になっている夏のアルバイトの時期がやってきた。

第一話：夏の始まり（前書き）

この作品はBL^{ボーイズラブ}です。過度な表現はありませんが、気分を害される恐れがありますのでくれぐれもご注意ください。

第一話：夏の始まり

人を好きになるのは理屈ではない。

それは心では分かっているけど躊躇ってしまう部分もある。だが、それを受け入れる事が出来れば、きっと素晴らしい世界が広がるのだと思う。

そう……俺はきっと望んでいたのだと思う。

その思いに、その気持ちに、気付かされたときに――

夏の日差しが徐々に強く、熱気のこもった風が吹き抜けて晴れ渡る空の香りを届けてきた。

「……あちー」

と、現実逃避したところでこの暑さがどうにかなるものでもないか。

「そうだね。暑くなってきたよねえ」

ほうっと熱っぽい吐息の美少女が俺を見上げてニッコリ笑顔。

こいつ、日に日に美少女レベルが上がっているのではないか？

このままでは近いうちに最高レベルに達してしまうかも知れない。

それからちまちまとドーピングアイテムを入手してステータスを最高値まで……って、暑さのせいで俺の頭は沸いてしまったようだ。

「そういながら、なんで汗一つかいてないんだ、お前は」

「そ、そんな事ないよ。ボクだって暑いんだから」

少しむくれたような顔をして制服の胸元を掴んでパタパタと仰ぐ姿は、我が煩惱を細胞レベルで刺激してやまない光景だ。

……ぐっ。

だが、そこで煩惱に流されてはいけない。

それが色白の透き通るような肌と、ほのかに上気した頬に潤んだ瞳で俺を見上げ、唇から艶かしく気だるそうな息を吐く、この『美少女』は――

「どうしたの？　ねえ、なお君ってば」

クイツと俺の制服を掴んで引く、こっ恥ずかしい事をしているこいつは、『男』なのだ！

「だーっ、暑いからくっつくな」

「あ、ごめん」

ビクツと手を離して俯き加減で俺を見上げる――って、上目遣いですか！　美少女の最終兵器『うるるん上目遣い』がここで発動なのですか！

「ぐっ、こんなものに俺は屈しないぞっ」

「きゃっ――ご、ごめん」

シュンツとなった見た目は完璧な美少女で、悲鳴も女の子顔負けの正統派(?)だ。

名前を藍野悠あおのゆうといい、生まれた病院から一緒の幼なじみである。

肩口より少し長い髪は夏の日差しに一層の煌きを放ち、長い睫毛に円らな子犬チックな瞳。小ぶりの鼻の下にあるぷるっと柔らかそうな唇は何もしてないのに艶々で、俺の同じ男なのか本気で怪しいと思ってしまうわけだ。身長も昔は俺よりも大きかったと思うが、

今では頭一個分ほど――俺一七五センチ、悠一五六センチ――俺の方が高く、並んで歩くと違和感ないほどにカップルに見えるらしい。

本当に、見た目だけは無駄に『美少女』しているが、どういうわけか声も女の子もびっくりの可憐な乙女声で、目を閉じて聞いていると中身が男だという事実を本気で疑問に感じてしまう。一応、子供の頃にその“証拠”を確認しているわけだが、それでもときどきこいつの性別を疑うときがある。

なにせ、中学のときから美少女に磨きがかかり、何度説明しても未だにこいつを『女』だと思っている野朗達からラブレターやら告

白される日々を過ごし、その仲裁役に何故か俺が借り出されてしま
うので、今では俺が悠の彼氏とされている節があり、一部の女子か
らはエロ妄想全開な視線を向けられているわけですよ。

「ご、ごめんね……っ……ごめんね、なお君」

それが、今だったりするのだが、ね。

「大きな声出して悪かった。だから、泣き止め——なっ」

「う、うん」

ぐすつと鼻をすすり、目に涙をいっぱい溜めて微笑むその笑顔は
反則ですぞ、悠ちゃん！

「ほら、行くぞ」

「あ——待ってよ——」

何だか妙な空気になりそうなこの場を一刻も早く立ち去るべく、
俺はうしろから聞こえる悠の声を無視する事にした。

振り返ったら、多分俺が駄目になりそうだったから……。

七月——

初夏の風はいつしか夏の匂いと熱気を運び、季節は夏本番を迎え
ていた。

「明日から夏休み、か」

放課後の教室。

残っているクラスメイトはわずかだが誰に言うわけでもなくポツ
リと呟いたのに、その声に反応したかのように駆け寄ってきたのは
悠だった。

「なお君」

「んっ？」

空調の利いていない熱気渦巻く暑い教室の中で、何故にこいつだ
けは元気なのかを知りたい。

ああ、そういえば悠って夏生まれだったな。夏生まれは暑さに強

いっていうけど、それをいうなら俺だって夏生まれだ。

俺、笹山直人が八月一四日生まれ。

で、藍野悠が八月一九日生まれ。

生まれた病院が一緒で家が近所（三軒隣）。親同士も幼なじみの四人組で、未だに仲良しだから俺達はある意味では兄弟のように育ち、微妙に俺の方が数日早いから『お兄ちゃん』で、悠が『おとう』となっているが、同い年で大して違いなどあるわけがない。

大体、同じ八月生まれなのに、俺は夏が苦手だ。というよりも、暑いのが我慢出来ん。

「今年もバイトするの？」

「……ああ、そうか」

一瞬、悠が何を言っているのか分からずに呆けてしまったが、不意打ち気味に「もうっ」と軽やかに微笑む悠の顔に不覚にもドキッとしてしまった。

……あ、あかん！

夏休みになって浮かれている場合ではないぞ、俺。

「そうだな。多分——というか、絶対に連絡が来ると思うぞ」

「だよな。あき姉さん、『来年もよろしく』って言っていたし」

「あれは悠にいったんだと思うぞ。中々似合っていたからな、悠の——」

「うわーうわーっ、思い出しちゃ駄目だよっ、だめ、だめーっ」

瞬間湯沸かし器も真っ青の勢いで耳から首まで真っ赤にした悠が、胸の前できゅっと拳を握り、恨みがましい目で口を尖らせて俺を睨んでいた。

……ぐっ。

怖くない。悠に睨まれてもまったく怖くない。寧ろ、かわいいいく

らいで思わず抱きしめ——って、俺は何を考えているんだ。

「まあ、アレのおかげで去年は過去最高額の売り上げを記録したらしいからな」

「う、嬉しくないよ……ボク、男なのに」

力なくしゃがみ込んだ悠はため息を吐いて項垂れているが、確かにアレはトラウマになってもおかしくない出来事だったしな。

「今年は俺一人でもいいから、無理に付き合わなくてもいいぞ」

「えっ？ あ、えっと……」

「毎年あき姉の被害に遭うのはお前なんだからさ。無理する事はないって」

まあ、アレが見られないとなれば客足も遠のくだろうし、明美さんからは連れてこいと言われるのがオチだろうし。

だが、俺としては何となく……本当に何となく、悠には無理をして欲しくないと思っている。

こいつは俺がすると言えば、どんな事でも一緒にやりたがるし、そのための労力は惜しまないタイプなのだ。その辺は男なんだと思ってしまうが、何でもかんでも俺に合わせるのはどうかと思うわけですよ。

「ボ、ボクも行くっ」

ただ、俺も悠の性格を知っているから、ああ言えばこう言うのを熟知しているつもりだ。

……やれやれ。

そう思いつつも、胸の前で力いっぱい拳を握ってやる気満々の顔をしている悠が変わっていない事に嬉しくて、つい笑ってしまった。

「もう、何で笑うの」

「い、いや……それじゃ、二人ですか」

「うんっ」

とびっきりの笑顔。

本当にこいつは生まれてくる性別を間違えていると心の底から思うよ。こいつが女なら……間違いなく、俺は惚れていただろうな。

この笑顔を見るたびにそう思えてしまう。

『好きになるのに、理屈は関係ないよ』

ふと、昔——いや、去年言われた事を思い出し、何とも言いようのない気持ちになってしまった。

あの人は確かにそういう人だし、その生き方には共感は出来るが実行までは出来ないと思っている。だが、確かに“そうだ”と思っている自分もいるのは事実。

理屈じゃない、か。はあ……それは分かっているが、やっぱり『理屈』で考えてしまうとアウトだよな。

夏休み三日目。

俺と悠は住み慣れた町——電車で駅五つほど——を離れ、白い砂浜が広がる海辺の町へやってきた。

「……暑い」

「暑いね。でも、海が綺麗だよ、ほらっ」

うだるような暑さにすでに疲労困ぱいな俺と違い、元気な悠が俺の腕を取って歩き出す。

「暑いから腕を絡めるなって」

「それなら、早く日陰にいこうよ。なお君、汗がすごいから心配なの」

グイグイと俺の腕を引っ張り、片手で風に吹かれて飛びそうになる麦藁帽子を押さえて微笑む悠は、『麦藁帽子と海辺の美少女』という絵画チックなタイトルが似合いそうなほど画になっていた。

「どうしたの？　もしかして、気分悪くなっちゃった？」

「あ、いや……」

「無理しちゃ駄目だよ」

まあ、イメージでは白のワンピースなのだが、実際はキュロットパンツにTシャツ、薄ピンクのパーカーという格好なのだが、顔が顔だけにさっきから男どもがこちらを振り返って鬱陶しかった。

ちなみに、今被っている麦藁帽子は去年の誕生日に俺がプレゼントしたもので、ピンクのリボンがポイントである。

一応、俺達は毎年のようにプレゼントを交換しているので今では当たり前のようになっているのだが、さすがに毎年続けるとあげるものがなくなってくるというか、今年はどうしようかと考えている次第だ。

まったく、男に贈るプレゼントを考える暇があったら、女の子に贈るプレゼントを考えたいぞ。

……。

……。

それから暫く日陰で休憩した俺達は目的の場所——海の家『アクアマリン』へ到着した。

「ごめんくださーいっ」

むあっとした熱気を含む風が足元を流れ出し、思わず帰ろうかなと思いながらも一度呼ぶと、奥からゴソゴソと音がした。

「んあー……誰？　こんな時間に」

「こんにちは。今年もお世話に——んぎゃっ」

奥から気だるそうに煙草をふかしながら現れた人物を見て、さすがに声を上げそうになってしまったが、ゆでだこかと思うほど顔を真っ赤にした悠が俺の前に立ち塞がり、「見ちゃ駄目っ」と俺の目を覆ってしまった——というか、目を潰しそうな勢いで塞ぎ、現在の俺の視界はゼロです。

「あら、ナオにユウじゃない。二人とも早かったのね」

なので現在は音声のみでお送りしております。

しかし、のんきな声が聞こえるが俺は真っ暗で何も見えません。ただ、触れている手のひらの温もりが何だかこそばゆくて俺はドキドキとしていた。

「どうした、二人とも？　もしかして、イチャイチャするところを見せ付けているのかしら？」

「違うってば。それよりも、あき姉——出来れば、服を着てもらえると嬉しいのですが」

「んっ？　……おおっ、すまん。暑いから脱いで下だけだったのを忘れてた、あはははっ」

豪快な笑い声と共に遠ざかっていく足を聞きながら、真っ暗な視界の中で先ほど見た光景を思い出す。

……でかかったな。

大きなメロンが二つとさくらんぼが二つ。驚きのあまり実感が湧かなかったが、あれは間違いなく大きな乳だった。しかも、下はスケのパンツ一丁だったし。

「はあ……もう、あき姉さんのほか」

「何だか、歳を追うごとに大胆というか、自分が女だって意識がなくなっているような気がするぞ」

「多分、ボク達が男として見られないだけかも」

それをお前がいうか、悠よ。

どこからどう見ても女の子にしか見えない悠と、どっから見てもむさい男の俺。いや、男として扱われていないと言うのならそうなのかも知れないが、明菜さんにとってはどっちも弟のような存在なのかも知れないな。

さっき露出狂紛いの格好で俺達の前に現れたのは、俺達の幼なじみである宮下明菜さん。

家の近所にある居酒屋の看板娘で、その性格は豪快の一言で表せる姉御な人だ。夏の時期になると、あき姉は親戚が経営している海の家を手伝いにやってくるのだが、俺と悠も子供の頃から一緒に来て手伝っていた。

まあ、その延長で今でも手伝っているわけだが、中学に入った頃からちゃんとしたアルバイト扱いとなり、それなりの給料をもらえるようになった。

ただ、学生の間は遊びたいだろうというおじさんの配慮で、二週間の期間限定アルバイトである。ようするに夏休みの宿題もちゃんとやれよという意味が込められているわけですね。

「はははっ、おまたせー」

と、奥から現れたあき姉は、上はビキニの水着で下はショートパンツという、丸見えだったさつきよりも何だかエッチな格好で登場してきた。

「……なお君」

「な、なんだよ？」

そして、何故か悠が頬を膨らませて俺を睨み、「知らないっ」とそっぽを向いてしまう始末。

「あいかわらず、仲がいいね」

「そ、それほどでも——って、違う！」

「あら、何が違うのかしらね。二人してイチヤイチャしちゃって……お姉ちゃん、ちょっと興奮して下腹がキュンってして溢れちゃいそう」

「止めんかつ、エロ魔人」

あまりに自然なエロ会話に思わずツツコミを入れてしまったが、隣でちよっとだけ悲しそうな顔をした悠に違和感を覚えたが、目の前では露出狂が身をくねらせて悶えている姿が痛かった。

「もういいや、それで、おじさんは大丈夫なの？」

「ただのギックリ腰だから心配いらないって」

ケラケラと笑うあき姉の顔に少しだけ寂しそうな色が滲んだがす

ぐに元に戻り、俺達を見てまた笑う。

本来ならこの経営者であるあき姉のおじさんがいるのだが、今年はやっとした理由で入院しており、おばさんもその看病でこちらには顔を出せないという。

……しっかしなあ。

おじさんがギックリ腰になった理由が『夜の営み』って聞いたときには“いい年こいて”と思ったが、あの仲良し夫婦ならアリなのかと思ってしまった俺もどうかと思う。

「だけど、おじさんが入院したってメールもらったときは驚いたよ」「私が一番驚いたわよ。ナオとユウに会えなくなるかも思ったら、お姉ちゃん泣きそうだったんだからね」

本気なのかどうかは分からないが、三つ歳が違う俺達とは学校での思い出は小学校まで。中学と高校とは見事なまでに三学年違うので卒業と入学の繰り返しで、思い出は休みのときに会って出かけるくらいしかない。だからなのか、夏休みのバイトは妙に張り切っており、その意気込みは半端ないものだった。

「ふふっ——でも、ナオとユウなら私の処女、あげてもいいわよ」

「イリマセン」

ただ、テンションが高すぎてついていけないときの方が多いわけだが。

「んじやつ、冗談はこれくらいにして、二人とも荷物置いてきたら」

「あ、うん。部屋はいつものところ使っていいんだよね？」

「そうね。いつもの部屋……あっ」

さっそくお世話になるおじさん宅に向かおうとした俺の耳に届いたのは何とも間抜けな声で、不思議に思って首を傾げている俺に苦笑したあき姉がポリポリと頬をかいていた。

窓から吹き込む風は潮の香りを運び、いつも感じている街の風とはまったく別物だった。

「ふう……」

今日から二週間ほどお世話になる海の家『アクアマリン』

海水浴場によくあるタイプの海の家で、さして目新しいものはない。しかし、毎年それなりのお客がくるのは単にあき姉と悠のおかげだろう。

あの二人が看板娘——一人微妙だが——として働き、ここ数年はそれなりの収益が上がっているらしく、おじさんの顔はいつもニコニコだった。だからなのか、年甲斐もなくがんばってしまったのだろうな。

「ね、ねえ……なお君」

「んっ？　——んおっ」

「きゃっ」

ぼんやりと考え事をしていた俺のすぐそばで声がしたのでそちらを向くと、目の前数センチのところに悠の顔があった。

「び、びっくりさせるなっ」

「ご……ごめん」

ぽんつと真っ赤になった悠は驚いて後退したかと思えば、すぐに泣きそうな顔になって俯いてしまった。

「どうした？　別に怒ってないからそんな顔するなって」

「う、うん」

だが、一向に顔を上げる気配はなく、先ほどより泣きそうな表情がより一層強くなった気がした。

さすがにこうなっては俺にもどうしていいのか分からない。ときどき、悠は何かを耐えるようにして俯いたままにいる事がある。

そして、“あの日”から悠は、涙を見せる事があっても、声を出して泣く事を我慢して耐えている節があるが、それが何を意味するのか、何を考えているのか、俺には分からない。でも、俺はそんな悠が落ち着いて話してくれるまで、顔を上げてくれるまでゆっくり

と待つようにしている。

……。

……。

それからどれくらい経っただろうか。

ゆっくりと、でも先ほどのように泣きそうな顔ではない悠が俺を見て優しく微笑み、「ごめんね」と小さく呟く。

「気にするな。それより、荷物を片付けるとするか」

「そう、だね」

ゴシゴシと目元を拭い、少し赤く腫れたようになってる悠の顔を見ないようにしながら、俺は自分の荷物を開けて必要なものを仕分けていく。

さすがに二週間もここで住み込みのアルバイトをするわけで、荷物の量は必然的に多くなってしまうのは仕方ない。更に夏場という事もあり、汗をかいたりして急遽着替えが必要になったりするだろうから、下着などは大目には持ってきたつもりだが……悠の荷物はなんだ？

「な、何？」

恥ずかしそうに服を胸元に隠し、頬を赤く染めて目を反らすその仕草。

……ぐふっ。

お兄さん、悪い道に走っちゃうぞ。と思いつつ、夏休み初日に宅急便で送っていた大型のトランク二つと格闘している悠のうしろ姿をチラチラと見ながら、俺はこの状況は大丈夫なのかと心配になってきた。

本来なら俺と悠は別々の部屋を与えられ、バイトをする事になっていた。そう、去年まではそれでやっていたし、今年もそうだと思っていた。

しかし、やってくれました。おじさんがやらかしてくれたんです。何でも、アクアマリンの店内と外装の一部を改修する予定だったらしいのだが、その前にギックリ腰で入院したために改修はキャンセルとなり、今年は今まで通りで行く事になった。

だが、問題が一つ――それは、その改修に使うはずだった大量の資材や器具の置き場所がない事だった。

アクアマリンには休憩部屋はあるが生活スペースはなく、おじさん宅はアルバイト用の空き部屋を三つ用意しているが、こともあろうにいつも悠が寝泊りしていた部屋に改修用資材を押し込んでしまったらしく、結果部屋数が足りなくなったのだ。

そのため、あき姉が一部屋を占拠してしまうと、俺と悠は必然的に一緒に部屋となってしまうという事態が発生したわけですね。

別に同じ部屋が嫌というわけではないが、何となく悠が嫌がつているような気がしてならないのだが……気まずいまま、二週間近くも過ごすのは勘弁して欲しいぞ。

「……ねえ、なお君」

などと考えいた俺は声を出す事も出来ずに恐々と振り返ると、白い肌を首まで赤くした悠が俯き加減で俺をチラチラと視線を逸らしながらも、何かを言いたそうな顔をしていた。

「どうした？」

だが、その顔に子供の頃の思い出が一瞬にして蘇り、今まで感じていた様々な“もの”が全てどこかへ消え去り、妙に落ち着いた心を取り戻して口を開く事が出来た。

「ボクと一緒に……え、えっと……迷惑……ない？」

多分、普通の人なら何を言っているのか分からないだろう。

『ボクと一緒に迷惑じゃない？』

だが、俺には分かる。付き合いなら家族並みに長い悠の事は色々
と知っているつもりだ。さすがに全部を理解する事は不可能だが、
分かる部分は理解してあげたいのだ。

悠は俺にとって大切な幼なじみなのだから……。

「別に迷惑じゃないぞ。おっ……もしかして、悠は寝相が悪いのか
？」

「そ、そんなことっ………ないと、思うけど」

まあ、自分の寝相など知った事ではないから答えられないのは仕方
ないが、それでも一生懸命考えて答える辺りが悠らしい。

「なら、気にするな。それに、この部屋はエアコンもついているし、
快適だから問題はないだろ」

「そうだね。でも、エアコンならボクが使っていた部屋にもついて
いたよ」

「そりゃそうだな」

微妙な空気も悠の笑顔と共に消え去り、俺達は荷物を広げて明日
からの準備をしていた。

それから数時間後——時刻は午後一〇時。

夕食をそうそうに食べ終え、みんなでテレビを見ていたのだが明
日からの仕込みがあると、あき姉が席を立ち、悠は風呂に行っ
てしまったので現在俺が一人でテレビを独占していた。

しかし、チャンネルを変えてもこの時間ってニュース番組が多く
てロクな番組がなく、仕方なく部屋に戻ろうとしたところであき姉
に呼び止められた。

どうやら、今年は俺達三人で店を回す事になるらしく、おばさん
はおじさんの看病に付きっきりになっているらしく、近所のお手伝
い部隊——おばさんのお友達——も忙しいときは手伝ってはく
れるらしいがあまり当てには出来ないらしい。

「そりゃ、まいったね」

「まあ、ね。頑張りすぎて倒れないようにしないと――」

昼間の格好にフリルのエプロンという色々な意味で煩惱が疼く格好をしているあき姉は、少し渋い顔をして俺から視線を逸らし、何かを言い淀んでいるようだった。

「どうしたの？」

「あ、うん……ああ、そうだ」

と、踵を返した俺にワザとらしく声をかけたあき姉はポンツと手を叩き――

「部屋、ごめんね。片付けようと思ったんだけどさ――余計な事をするとおじちゃんがるさいから」

申し訳なさそうに手を合わせていた。

「それならさっきも聞いたよ。別に悠と一緒にの部屋でも問題ないからいいって」

「まあ、二人とも仲良しだからね。私の前で堂々とイチャイチャしていたし……いつから付き合っているのかしら？」

「だから、付き合っていないってば」

「あら、そうなの」

さも残念とばかりに肩を竦めて見せるあき姉の顔はまったく残念がっておらず、寧ろ面白がっているし。

「ナオも好きなら手放しじゃ駄目よ」

「だから、何でそうなるんだ」

「なら、嫌いななの？」

「誰もそうは……あき姉って、極論過ぎるって」

ああ、完全に遊ばれているな、俺。

「好きなら好きでいいのよ。それがどんな『好き』でも、ね」

「……理屈はいらない？」

「そう。好きって感情の前に、理屈なんて意味がないのよ。自分を信じなさい、自分が好きな“もの”を信じなさい」

何だか分からないが気付けば、あき姉に説教されている俺がいる

わけ。

でも、それは嫌なものではなく、あき姉なりの励ましだった。そして、その励ましはいつも役に立つものばかりで、俺は何度も助けられていた。

『好きになるのに、理屈は関係ないよ』

去年も同じ事を言われたが、今年は少しだけその意味が分かったような気がする。だけど、それには俺だけではどうする事も出来ないものばかりで、結局は何もしないままに時間だけが過ぎていく状況に、微妙だけど焦りも感じている自分がいる事に気付かされてしまった。

「あ、そうそう」

「今度は何？」

「私、彼女が出来たから」

「……………はっ？」

一瞬聞き間違いかと思ったが、あき姉の顔は至って真面目。というか、幸せいっぱい思い出し笑いを浮かべて気持ち悪かった。

「あ、あの……『彼女』って、何？」

「ナオって、馬鹿？」

「馬鹿って失礼な。言葉の意味を知っているから聞いてんだよっ」
真顔で哀れまれたし、ちよっとショックだぞ。

「去年ね、ここでバイトしているときに告白されちゃってね」

「…………告白されたんだ」

「うん。でも、さすがに相手が女の子でしょ？ 私も女だし、まさか告白されるなんて思ってなかったからさ……色々悩んじゃって」
確かに色々悩んでいたのは俺も知っている。

「ほら、ナオも知っていると思うけど——眼鏡をかけたショートカツトの女の子、覚えてない？」

「眼鏡でショートカット？ ……あ、ああっ」

そこで浮かんだのは毎年のように姿を見る常連のお客さんだった。いつも同じ席に座って一人にいる大人しく、あき姉が気にかけていた俺よりも一つ上の女の子。悠が、「あき姉さんを見る目が恋する乙女みたい」って言っていたが、まさか本当だったとは真実は小説よりも奇なりってまさにこの事だな。

……だけど、そっか。

あのとき、何を悩んでいたのかまでは知らなかったが、そのときに告白されて一人で悩んでいたのだろう。確かにこんな事を簡単に相談出来るものではないと思うが、今のあき姉は晴れ晴れとした顔をして悩みから開放された喜びに満ち溢れている。

「幸せみたいだね」

「まあ、ね。理屈じゃ手に入らない幸せだから、ね」
なるほど。

あの言葉は実体験を基にした言葉なのか。だから、いつものあき姉の言葉よりも重みがあるように思えたんだ。

……いや、そうじゃない。

俺も気付いているからこそ、その言葉に重みを感じたんだ。

「色々考えるのはいい事だけど、幸せは意外と身近で……手の届く場所にあるもんだよ」

ポンッと俺の肩を叩いて自分の部屋へと入っていくあき姉のうしろ姿を眺めつつ、言葉を噛みしめながら少しだけ胸の奥が暖かく、少しだけチクリと痛んだ。

第一話：夏の始まり（後書き）

久しぶりに書いてみました。なのに、BLです。

別に意味はないですよ？　ただ、思いついたままに書いたものでむちゃくちゃかも知れませんが、最後までお付き合ってください。

第二話：過去への贖罪

一夜明けて今日からアルバイト開始。……なのだが、寝不足で頭がぼーっとしております。

ぶっちゃっけ、太陽が黄色いです。

「……ね、眠い」

「大丈夫、なお君。無理しないで、もう少し寝ていたらいいのに」
諸悪の根源が何を言うか！ と声を大にして言いたいところだが、これは俺一人が招いた事なので八つ当たりは男らしくない。

そして、お前は本当に男らしくないぞ、悠！

もう、寝ている姿とか、寝息とか、寝言とか、ことごとく『女の子』なんだよ、こいつは。

しかも、パジャマが猫柄ってどうよ？ 俺、一瞬目を疑ったぜ、マジで。ちよっと恥ずかしそうにはにかみながら「似合うかな？」
って聞かれたら、男は絶対にイエスしか言えないっての。

そんなのが隣に寝ていると思うと気になって寝られるわけもなく、あき姉と話していた事も思い出して余計に目が冴えてしまい、結局そのまま空が白くなる頃まで記憶がある。

「ところで、ユウはぐっすり寝れた？」

「えっ？ あ、うん」

「そっか。どっかの誰かさんは、ユウの寝顔に興奮して寝られなかったみたいだねえ」

「えっ？ えっと、ええっ……あっ」

余計な一言とはまさにこの事。

ニタニタと笑いながら意味深な言葉だけを残してあき姉は味噌汁を啜り、頬を赤く染めた悠は恥ずかしそうに顔を伏せてチラッと俺を見たかと思えば、すぐに逸らして俯いて膝の上で指をくにゅくに

ゆしていた。

「初々しいわねえ……いや、新婚さんみたい」

この人はどこまでも俺達で遊ぶつもりらしい。まあ、このやり取りも去年と一緒なのだが、去年と違うのは俺と悠が同じ部屋で寝ているという事実であり、寝顔もバッチリ見てしまったという事実があるわけだ。そして、それは言い訳がしようもなく、健全な青少年なら仕方ない事だと力説したい。例え、相手が悠であっても……いや、悠だからこそ？

「かわいかったでしょ？」

「な、何がだよ」

「何がって、ユウの寝顔に決まっているでしょ。あっ、それとも——ナオの寝顔はかわいかったのかしら、ユウ」

と、俺から悠へとターゲットを移したあき姉は楽しそうで、ターゲットにされた悠は「ひゃうっ」とかわいらしい悲鳴をあげて耳まで真っ赤にして俯いていた。

「あら、その様子だと……ユウはナオの寝顔を見たのかしら——っ」

凶星とばかりにビクツと身体を震わせた悠を面白そうに、でも愛しそうな表情で見つめて微笑むあき姉にため息を吐きつつ、これ以上からかわれないようにご飯をかきこみながらテレビの天気予報を眺めていたが、予報は夜から雨だった。

慣れ親しんだアクアマリンの正装——店名入りエプロン——を身に着け、俺は夏の日差しを一身に受けながら開店の準備をしていた。「あち——倒れるかも知れんな、俺」

寝不足の身体に夏の日差しは堪えるが、悠と一緒にいるとあき姉が面白半分だからってくるのでそうそうに退散した。

……ごめんな、悠。

何も出来ない不甲斐ない俺を許してくれと思いながら、中から聞こえる悠の悲鳴とあき姉の笑い声を聞き流す事にした。

……。

……。

俺がここでバイトを始めて数年になるが、初日は大概暇なのだ。開店して少し経った頃から常連客である近くの漁師さん達がやってきたが、おじさんの事は知っているので適当に喋ってから帰って行った。無論、注文はしてくれたが微妙に残されてしまい、悠やあき姉は気にするなと言っていたが、同じ材料と道具を使っておじさん直伝の調理法でも、やはりおじさんには適わない。別に競うつもりはないが、常連のお客さんはアクアマリンの味と言えはおじさんの味なのだと痛烈に実感してしまった。

まあ、俺も男の子なので負けっぱなしは悔しい。

なので機会があれば次こそは満足出来るものを提供していたと思いつつ、外を眺めてみたが俺の気分と同じように暗かった。

朝はあれだけ天気がよかったのに昼過ぎ辺りから曇り始め、夕方になった今はどんよりとした雲が空一面を覆っていた。

「初日から幸先悪いわね」

窓から外を眺めながら煙草をふかすあき姉はため息一つ。

「今日は店じまいか——ナオ、表を片付けておいて」

店内を見渡してため息をもう一つ吐き、立ち上がったあき姉は奥へと消えていき、残されたのは俺と悠だけだった。

……仕方ないか。

店内はお客ゼロ。

外もさっきまでは遊んでいた姿があったのに今は誰もおらず、そうそうに引き上げたのは見ても分かる。

「天気予報だと、今日の夜からだったのにね」

「そうだな。まあ、ここにいっても仕方ないから片付けるか」

すでにやる気をなくした店長代理の指示に従い、外へ向かうとしたところで曇天の空が唸り声を上げていた。

「雷かよ。こりゃ本格的に降る前に片付け——」

そう思い、急いで片付けようとしたところで、不意にTシャツを引っ張られて振り返ると、そこには今にも泣きだしそうな顔をした悠が震えていた。

「ど、どうし——」

と、そこで思い出した。

「大丈夫だ、悠。怖くないから」

言葉なく、ただ震える悠の手を握り、落ち着かせようとしたが曇天の空は俺達の事などお構いなしに唸り声を上げ、空が閃光に包まれた。

「——っ」

雷鳴轟く。

唸る空の上で暇な神様が遊んでいるのかも知れないが、出来れば今だけは静かにしてほしいものだ。

「大丈夫だ。俺がそばにいるから……大丈夫だ」

ぎゅっと俺にしがみついて胸に顔を埋める悠は肩を抱き、俺は昔の自分を呪っていた。

……ごめんな。

戻るのならあのときに戻って自分を怒ってやりたい。そうすれば、悠が雷を嫌いになる事なんてなかったはずなのに。

あの日。

俺と悠は小学校の友達と校庭でかくれんぼをして遊んでいた。あの頃の悠のような感じではなく、まだ“男の子”を感じる事が出来るくらいに元気な方で、かくれんぼなどは俺よりも隠れるのがうま

かった。

しかし、それがアダになった。

その日はあまり天気がいい方ではなく、かくれんぼを始めたときには空は雲に覆われて今にも雨が降りそうだった。それでも、子供だった俺達は関係なく遊んでいたがポツポツと降り始めた雨に、一人また一人と帰ってしまい、俺も雨が本格的に降ってくる前に帰ってしまった。だが、途中で悠の事を思い出して慌てて引き返したが、学校の校庭についたときには雨は本格的に降り出して雷が鳴っていた。

しかし、大変だったのはそれからだった。

俺は今までかくれんぼで悠を見つけた事が一度もなく、他の友達も見つけるのに苦労するほど隠れるのがうまかった。だけど、そんな事を言っている場合ではない。俺は雨に濡れるのも気にせず悠を探し、校庭をグルグルと走り回り、やっとの事で悠を見つめた。

こんな場所に隠れていたのかと思ったが、見つけたときの悠は涙と鼻水で顔がぐしゃぐしゃ。その場にしゃがみ込んで震えているその顔を見たとき、俺は何て事をしてしまったのだろうと心の底から思った。

悠を泣かせたは俺だ。

俺が悠の事を置いて行ったから悠は泣いているんだって思い、悠の顔を見る事が出来なかった。でも、悠は俺の顔を見るなり飛びつき、大きな声で俺の名前を叫びながら大粒の涙を溢れられて泣き出してしまった。

『なお君怖かったよ』

その言葉だけがナイフのように胸に刺さり、その言葉は呪詛のように耳に残り、俺はただ泣いている悠を慰める事に精一杯だった。それから少しして雨もあがり、俺達はしぶ濡れのまま家に帰った。帰る途中でちゃんと悠には全てを話して謝った。本当に申し訳ない

と思ったから、泣かせてしまった事を謝り続けた。

そんな俺を悠は笑いながら許してくれた。でも、それは悠が優しいからであって、俺自身は自分を許せていなかった。

そして、あの日から数日後に起こった“出来事”を境に、悠は徐々に大人しくて引っ込み思案な性格へと変わり、今まで以上に俺と一緒にいる時間が増えていた。別にそれが嫌だと思わなかった。いや、あの日の出来事が悠の心に、『雷嫌い』のトラウマになって残っている数年経ってから気付いたときから、俺は償いのために一緒に時間を過ごす事を心に誓った。

多分、それは俺の中に負い目があったのからだと思う。だが、悠が徐々に変化していく事に戸惑いながらも、悠と一緒に過ごすのが少しずつだが楽しくなり……その頃から悠の存在が、幼なじみや友達では割り切れない存在へと変わってきていたのを心のどこかで感じていた。

「大丈夫だ。俺はどこにもいけないから」

「……っ……なお、君」

「お前を一人にはしないから。大丈夫だ」

これは俺への罰だ。

大切な幼なじみの心をめちゃくちゃにしてしまった俺への罰なんだ。

「なお……くん。なお、くん……」

か細い肩を震わせて怯える小鳥のように、悠は俺の名前を呼び続ける。

その姿が痛々しく胸に突き刺さり、前よりも酷くなっているような気がしてならない。俺は本当に取り返しのない事をしてしまったのではないだろうか。

そう思っても、今更それを変える事は出来ない。今の俺に出来る事は、ただ不安を消してあげる事だけ。

……悠。

何も出来ない自分に苛立ちを覚えながら、俺はただ早く雨が上がる事を祈り続けた。

夕食後。

雨は止むどころか強さを増していたが、雷は静かになってくれたので悠も落ち着きを取り戻し、今はあき姉と一緒にテレビを見ている。

で、俺は来る途中で買った男性ファッション雑誌を読んでいた。

「……夏だね」

雑誌の特集はどれもこれも夏ばかりで、しかもカップル前提が多くて読む気が失せてきていた。完全に買う雑誌を間違えたと思いつつ、ページをめくったところでふと目が留まった。

『夏の思い出を形で残そう』

何だか妙な特集だなと思いつながら、その内容を読み進めていくうちに自分達の誕生日を思い出した。

そういえば、今年はどうするかな。

別に必ず贈らないといけないというわけではない。ただ、俺の誕生日が先なので必然的に俺からもう事になるし、あの悠がそれを忘れるわけがない。というか、毎年俺の欲しいものをいつの間にか調べてさりげなくプレゼントしてくれる辺り、そこら辺にいる女の子より出来ていると思うぞ。

「うーん……」

しかし、俺は毎年よく分からないものを贈ってしまうのだが、悠は嫌な顔どころか本当に嬉しそうな顔で受け取ってくれるから更に心苦しい。

よしっ、今年こそは心のこもったものを贈ろう。

だけど、心がこもったものってなんだ？　そもそも、何故俺は悠へのプレゼントをこれほど真剣に考えているのだろうか？　いや、別に毎年いい加減な気持ちで贈っているわけでは決してないが、今年はどうしてしまったのだろうか。本当に分かん……こんな気持ちになるなんて。

「だーっ、くそ！」

何だか分からないがとても恥ずかしい気持ちでいっぱいだぞ、俺。プレゼントについては当人に聞けば欲しいものは分かるかも知れないが、生憎とあき姉のところへ行ったきり帰ってこないし。

いや、別に寂しいわけじゃないぞ？

ただ一人だと暇なだけで、本当に寂しいわけじゃ――

「……なお君、いいかな？」

「うひゃいっ」

しかし、人間は突然の出来事に弱いものです。

「ど、どどど、どうしたのっ？」

「い、いや――なんでもないぞ、うん」

慌てて読んでいた雑誌を布団の下に隠して平静を装ってみたが、障子の向こうで顔だけを覗かせている悠は驚いて目を丸くしながらも、心配そうな顔を俺に向けているのがとても申し訳なく思う次第です。

ごめんよ、悠。今の俺にはその顔を直視するだけの度胸はありません。

「そ、それよりどうしたんだ？」

「あ、うん。あき姉さんがアイス食べようって……なお君、アイス好きだよね？」

恐る恐るといった感じで伺いをたてる悠に心の中で土下座し、アイスよりも悠の笑顔が好きだぞと思ってしまった俺はどうかしてい

ると思います、マジで。

扇風機がそよそよと風を送り、縁側の風鈴が風情ある音色を響かせていく。

「暑いわね……はふう」

と、缶ビール片手におつまみをちびちびと食べるあき姉の前にはビールの空き缶が四つとアイスのカップが一つ並んでいる。

居間に呼ばれてすで一時間。酔っ払い親父が出来上がるのにはちようどいい時間で、あき姉の目もだいぶ据わってきていた。

「あき姉、あんまり食べるとお腹壊すよ」

「大丈夫だって。私のお腹は鋼鉄製——あはははっ」
酔っ払いだ。完全に出来上がっているよ、この人。

「ったく……飲み過ぎだって」

「そうだね。そろそろ止めておかないと、明日の仕事が出来なくなっちゃうかも」

呆れる俺に同意するように苦笑する悠は徐に立ち上がり、かいがいしくあき姉の世話してテーブルの上に片付けていく。その様はとっても画になるというか違和感がないくらいで、思わず見入ってしまった。

「ど……どうしたの？　なお君」

「……えっ？」

ハッと気付けば、俺は悠の事を見つめていたらしく、耳まで真っ赤にした悠が困惑したような顔で目を泳がせて落ち着きなくモジモジとTシャツの裾を弄っていた。

「あ、いや……その、悠ならいいお嫁さんになれるなって」

「——はうっ」

って、俺は何を言っているんだ？

「い、いや——違うっ、そうじゃなくてだな！」

「はにゅー……お、お嫁さん……ボクが、お嫁……なお君の、はう

うっ」

「だから違うって。そういう意味じゃなくて——って、俺の話を聞けーっ」

もう何が言いたかったのか分からなくなってきた。

ぽーっとした顔で赤く染まった頬に手を添えた悠は夢見心地の様子で、俺の言葉は耳にまったく届いておらず、いやいやと身体をクネらせて悶えていた。普通に女の子がやってもかわいいかも知れないが、悠がやるとこれほど破壊力があるとは思わなかった。

……か、かわいいじゃねえか。

あかん。俺の理性が何だか微妙な具合になっていらっしやる！
これは夏のせいなのか？

ひと夏の思い出が俺を大胆に——って、違うわ！

「ふふふっ……何イチャイチャしているのかしらねえ」

「ぐっ——あ、あき姉っ？」

一人妄想悶絶プレイ(?)をしていた俺の肩をグイッと抱き、酔っ払いがにへらと近寄ってきたが、思いつき酒臭い息を吐いてグダグダだった。

「あき姉、しっかりしろよ」

「私は酔ってないですよお……そーへーろーもー」

酔っ払いは酔ってないというからな。最後まで呂律が回ってないし、明日はあまり期待しない方がいいかも知れない。

「なおしゅんはー……ゆうきゅんの、こと……すきなからあ」

駄目だ。性質の悪い酔っ払いでしかないぞ、この人。

「ほーらー、こたへろー」

「あ、もう……悠の事は好きだよ。あき姉の事も好きだし、これでいい？」

酔っ払いの対処は適当に済ませるに限る。

「そっか、そっか」

「……へっ？」

「ナオはユウが好きなのね。いやいや、お似合いのカップルだぞー」
「ちょっ——あき姉、何をっ」

キュピーンツと光る目は楽しいおもちゃを手に入れたと言わんばかりで、そこにはさっきまでの酔っ払いはどこへいったのかと思うほどにしっかりと……いや、やっぱり酔っ払ってる。

「こら、ナオッ……何とか言いなさいよー」

「あ、あの……あき姉さん、ボクは」

「きやはははっ、ナオがボクだって——ぐふふっ」

ぽふぽふと肩を叩き、楽しそうに缶ビールを煽るあき姉。

ただ、肩を叩いているのは、とっても困り顔で俺に助けを求める悠だった。

……はああ。

その後、その酔っ払いを片付けるのに一時間以上かかり、風呂に入って床についたのは日付が変わる頃だった。

いつも聞こえる波の音も、今日は雨音にかきけされて聞こえない。明日も雨ならお客さんは期待出来ないし、雨が上がったとしても同じだろうし。そうなると、明日は今日並みに暇な可能性がある。ならば、明日の過ごし方を考えておいた方がいいのかも知れないなど思いつつ、隣で静かな寝息をたてる悠が寝返りを打ってこちらを向いた。

……ぐっ。

眠り姫。

暗闇の中。いつもなら窓の外から星や月の明かりが入ってくるが、

今日は生憎の雨で明かりはほとんどない。しかし、暗闇の中でも分かるほど、悠の姿は輝いており、頬にかかる髪、長い睫毛、白く透き通る肌。全てのパーツが陳腐な言い方だが女の子にしか見えず、その顔を眺めていると何故か心が安らいでいる自分がいる事に気付いた。

「なんだろうな……ったく」

何となく呟いた声は雨音にかき消され、自嘲気味な笑みが自然ともれてきた。

今までこんなにも気にした事はなかったのに、どうして悠の事ばかりが気になるのだろうか。それが分かっているような気もするが、どこかでそれを認めてしまうのが怖いと思っている自分がいるのも分かっている。

それを認めれば楽になれる。でも、認めてはいけない気がする。

俺はあき姉ほど強くない。あき姉みたいに割り切れない。

だって、俺は……悠を傷つけたのだから。

だから、認めてはいけない。それだけはまだ認めていけないのだ。

「……んっ」

と、不意に触れた温もりに俺は身動き出来ずに固まっていた。

身動ぎした悠の手が俺の手を包み、突然の事に驚いてしまった俺は手を引こうとしたが、そこでいつの間にか俺が悠へと手を伸ばしていた事実気付いてしまい、俺は何ともいえない気持ちに胸が締め付けられていた。

それほど広くない部屋で布団を並べて眠る俺達の間はわずか数センチ。遠からず、近からず、微妙な距離に何故か笑みがこぼれる。

……何やってんだ、俺。

悠の手に包まれた俺の手はほのかに温かく、更に空いていた手まです添えられて俺の手は優しい温もりにしっかりと包まれていた。夏の夜なのに不思議な心地よさが身体に広がっていた。ちよつと恥ず

かしいが別に嫌ではない。

そう思いながら眠りにつこうとしたが、悠が身動きをして薄っすらと目を開けた。

とろんとした目を向けてどこか幸せそうな顔をして目を閉じた悠はそのまま眠るのかと思いきや、いきなり目をパツチリと開けて俺の顔をじっと見つめていた。

「……な、なお君？」

「えっ？　――あっ」

そうだよ。悠が俺の顔を見ているって事は俺も悠の顔を見ている事だ。

「す、すま――」

驚いて飛び起きた俺は振りほどかれた手の温もりが急激に冷めた事で幾分かは冷静さを取り戻したが、悠は呆然としたまま自分の手を見つめていたが、突然声にならない悲鳴を上げてタオルケットを頭から被っていた。

「ゆ、悠っ」

さすがに驚いた俺は声をかけようとしたが、名前を呼ぶのが精一杯でそれ以上は言葉にならず、どうしていいのか分からずに困惑している、チラッと顔半分だけを覗かせた悠が暗闇でも分かるほど真っ赤な顔をして俺を見つめていた。

「な、なお君……ボク」

「いや、あれは悠が悪いわけじゃないぞ。俺もそうしたかったというか、気付いたら悠の手を握ろうとしていたというか――いや、そうじゃなくてだな」

駄目だ。自分で何を言っているのか分からなくなってきた。

「なお君、が……？」

「ああっ、だから気にするな。俺は悠と手を繋ぐのは嫌じゃないぞ。いや、悠が嫌なら繋ぐつもりはないがっ」

「そ、そんな事――」

突然、俺の言葉をかき消すような大きな声を上げて布団から飛び

出した悠は、今にも泣きそうな、どこか嬉しそうな、複雑な表情を浮かべて力いっぱい首を横に振る。

「ボクは、そんな事……思うわけ……」

自分でも馬鹿だなど思った。ズルいと思った。

俺があんな言い方をすれば悠が否定するのは心のどこかで分かっていた。なのに、俺はどこかでそれを期待していた。

「すまん。寝ていたのに起こしてしまって」

「ううん……気にしないで」

ちよつとだけ言葉に詰まった悠は眼を伏せて首を振り、俺の言葉を否定するように手を伸ばしてきた。

「でも、ちよつと残念だったかも」

「……残念？」

「う、うん……ボク、夢を……夢を見ていたから」

「夢……？」

「うん。とっても……とっても、懐かしい夢」

優しい笑みを浮かべ、目を閉じて微笑む悠の顔は幸せそうで、どんな夢を見ていたのかちよつと気になった。

「どんな夢だった？」

だから、自然と口にしていた。

「なお君と一緒に遊んでいる夢……手を繋いで、一緒に遊んでいる夢」

それは本当に子供の頃、何も考えずに遊んでいた頃の話。

男だとか、女だとか、そんな事を考えずに、ただ一緒に遊ぶのが楽しかった頃だ。それから少しして色々な事が分かり始めると手を繋ぐという行為が恥ずかしく感じてしまう歳になった。

それからは手を繋ぐ事もなくなり、それが当たり前となっていた。でも、今は違う。

「そっか」

「――っ」

悠の手から伝わってくる温もりが嬉しくて、自然と悠の手を握り

返していた。

ビクッと身体を震わせた悠だったが手を振り解くわけでもなく、ただ俺の顔を呆然と見つめていた悠の顔が見る間に赤くなっていくのが面白かった。

「ううっ……なお君、何だか意地悪だよお」

「別に意地悪しているつもりはないんだが……まあ、悠がかわいいって事で許してくれ」

「——っ」

甘えたような、どこか拗ねたような声を出して顔を逸らした悠だったが、弾かれたように俺の顔を見つめて口をパクパク。これはこれで面白いと思ったが、さすがにこれ以上は俺の理性が持ちそうにない。

「さ、さてと——そろそろ寝ないと、明日起きられないぞ」

「……ううっ、もう！　なお君が意地悪するから寝られないよー」

俺だってお前が気になって寝れそうにないだから一緒だ。とは、声に出して言えないが、何だかんだと言っても繋がれた手を離すつもりはないらしい。

俺も悠も……どこかで繋がっている手の温もりに、心が落ち着くのを感じているのだろう。

それから暫くして悠は規則正しい寝息をたて始め、どこが眠れないかと心の中でツツコミをいれて幸せそうな顔の悠を眺めながら夢の世界へと旅立った。

太陽は容赦なく昇り、朝はいつものようにやってくる。

窓の外からは昨日の天気が嘘のような日差しがカーテンの隙間から差し込み、今日は暑くなりそうな予感がしていた。

「悠は……って、いないし」

隣を見ても綺麗に畳まれた布団があるだけで、主の姿はなかった。ちよっと寂しいと思ったのを振り払い、微妙に寝不足な頭を抱えて

顔を洗うべく洗面所へと向かった。

……。

……。

顔を洗って居間に行くと、リビングデッドを一匹発見した。いや、居間だけにとかじゃなくて、文字通りの物体がいるわけですよ。

「あき姉、おはよう」

「お……おはよ——いたたっ」

完全に二日酔いだね、これは。

「大丈夫……じゃないみたいだね」

「あうー」

テーブルに突っ伏してヒラヒラと手を振るあき姉を見つめ、今日は駄目だなと思いつながら店をどうするかを考えていたら、コトツとあき姉の前に湯気の立つお椀が置かれていた。

「あき姉さん、お粥出来たよ」

「あうー……あんがとー」

「熱いからもう少し冷えてから食べてね」

「うあ……分かったあ」

駄目だ、この年長者。

それは悠も同じ事を感じたのか、苦笑しながられんげを置いてあき姉の介護(?)をしていたが、ふと俺と目が合うと薄っすらと頬を染めて恥ずかしそうにはにかんでいた。

「おはよ、なお君」

「あ、ああ、おはよう」

一瞬、その顔が見とれていた俺は慌てて視線を逸らしたが、顔が熱くなるのを止められずに心臓は落ち着きをなく激しく打ち付けていた。

「すぐにご飯の用意するから、ちよっと待ってね」

「あ、ああ……俺も手伝おうか？」

「大丈夫だよ。ここにいて——ね、なお君」

クスッと笑みを浮かべ、軽やかな足取りで台所へと向かった悠が

横を通り過ぎたとき、ほのかにシャンプーの香りと共に悠の“匂い”を感じ、胸の奥が熱くなるのを止められなかった。

……悠。

それは甘美なものではなく、人間の根本的欲求。

いつの間にか、これほどまでに悠を求めている自分がいたとは――
――自分では気持ちを抑えられないほどに悠の事を欲している自分がいる事に気付いてしまった。

第三話…素直な気持ち

夏は開放的になる季節。

老若男女——は言い過ぎかも知れないが、誰もが『夏』という魔法にかかっていると思う。でも、その魔法がきれたときに何が残るかは本人次第。

本当に残したいと思う“もの”があるのなら、『夏』の魔法に負けないくらいの思いを持たなくてはいけない。

と、何となく詩人のような事を考えてしまった自分に赤面しつつ、『老若男女』って言い難いし、頭で考えても発音し難いんだなと実感していた。

……さて。

現実逃避はこれくらいにして、慌しく忙しいバイトも慣れてきたと思ってきたら、すでに折り返し地点。幸先不安だった天気もあの日以来晴天続きで、海水浴場はお客さんで溢れ返り、アクアマリンは本日也大盛況だった。

「——ナオツ、お好み焼きまだっ？」

「ちょっと待って！ 悠、カレーと焼きそば出来たぞっ」

時刻は一二時を回り、店内は人で溢れ返っていた。簡単に言えば満席。しかし、俺達から言わせてもらえば戦場だ。しかも、今日は日曜日だという事もあり、家族連れが多くて注文の数も半端なく多い。ついでにビールやらジュースの消費量も半端なくて冷蔵庫に補充しても追いつかない状況だった。

「くっそーっ」

「がんばって、なお君っ」

「分かってる——ほいっ、お好み焼き出来たよーっ」

カレーと焼きそばをトレイに載せ、優しい笑みを浮かべて戦場へ

と駆け出していく悠のうしろ姿を眺めつつ、次のお好み焼きと焼きそばを大急ぎで作り始めた。

……。

……。

それから二時間ほど。

やっと戦場から開放された俺は遅めの昼食となったが、疲れ過ぎて食欲がなかった。

「き、きつい……」

本来ならおじさんとおばさんを含めて五人でやるのだが、今年は三人しかないから分担がかなりきつめとなっている。

もっとも、朝の仕込みはおばさんがきてやってくれているようだが、それでも足りない分は自分達で何とかするしかない。しかも、俺が今担当しているのはおじさんが担当だった鉄板で、お好み焼き、たこ焼き、焼きそば、イカ焼き、などなど……食べればおいしいが、夏には絶対に自分では作りたくないもののオンパレードである。

そもそも、おじさんがギックリ腰になった時点で疑問にも思わなかったが、よく考えたらこういう店って食品衛生なんちゃとか、営業なんちゃらって、資格やら免許がいるはずだよなって思ったら、あき姉がしっかりと習得済みだった。

どうやら高校卒業してすぐに勉強して去年ようやく取る事が出来たらしい。

……すごいよなあ。

あの行動的な部分は尊敬に値するし、俺にも真似出来ない部分ではある。

「はあ……腕がパンパンだ」

コテの使い過ぎで腕がガチガチで、肘を曲げるのも一苦労。なので箸を持つのも苦労する状況で、昼食がそうめんってイジメだろ、絶対に。

「くっそー」

しかし、バテているわけにもいかないので、何とか箸を持ってそうめんをと思ったが、やっぱりつらいです。少しは慣れてきたとはいえ、おじさんの体力は半端ない事が立証されましたよ。さすがにあの歳で『夜の営み』でギックリ腰になるだけの事はある、と。

「……なお君」

などと、馬鹿な事を考えていたらひょっこりと障子の向こうから顔を覗かせた悠が、心配そうに俺を見つめて眉尻を下げていた。

「あっ、もう休憩終わりか？ 悪い、すぐに――」

「ち、違うよっ」

徐に腰を上げようとした俺のそばまで滑るように駆け寄り、ストンツと腰を下ろして俺の腕を掴む悠はブンブンと首を振り、意味が分からずに俺はもう一度腰を下ろした。

「ど、どうした？ 店の方は……って、妙に静かだな」

「お客さん、ちょっと途切れちゃって」

「そう……か」

で、この状況は何ですか？

微妙にスイートでラブな空気が渦巻いているのですが、ほのかに上気した悠の顔がとてつもなく近いです。

「それよりも……食欲ないの？」

「あ、いや、実はな――」

俺の顔と用意された昼飯を交互に見比べ、心配そうな悠の顔に見つめられて俺は正直に話すと、次第に泣きそうな顔を変わって何故か箸を握っていた。

「それじゃ、ボクが食べさせてあげる。食べなきゃ駄目だよ、なお君いっぱい働いているんだから、なお君にもしもの事があったら……ボク」

と、喋っている間にわさびまで溶いためんつゆにそうめんをつけ、

俺の口元へと近づけてくる。

……え、えっと。

これは何のドッキリですか？　もしかして、あき姉の悪戯なのかと思ったが、悠は俺が困るような事ならあき姉の申し出でも絶対に断り、逆にあき姉を説教してしまうほどの猛者だ。

あき姉曰く『あの子でナオをからかうのは金輪際止めるわ』って疲れ果てた顔で言われたときは、悠ってもしかしてあき姉より強いのかもって本気で思ってたくらいだからな。

「なお君……食べられない？」

「え、あ、いや」

「食べたいものがあるなら、ボク作るから……食べないと、夏バテしちゃうよ」

夏バテは夏が終わってからくるものだぞと思いつつ、目の前にあるそうめんを食べない事には話が進まない状況になっています。

しかし、これは——いわゆる、『あーんして』ではないですか？　深く考えなくてもそうだと思うのですが、当の悠は俺にご飯を食べさせる事に集中しているみたいで、自分が何をしているのかを理解していない様子。

困ったぞ、これは。どうにかしないと……って、食べるしかないのかな、やっぱり。

「……ゆう君」

目の前で今にも泣きそうな悠が箸を持ってクイツと口元に近づけて離し、離しては近づけを繰り返しているのを見ているのも面白い、というか、かわいいなと思ってしまった自分は死ねばいいと思います。

「た、食べるから、そんな顔するなって」

「う、うん——はい、どうぞ」

さすがにこれ以上は俺の精神も持ちそうにないと思い、覚悟を決

めて口を開けかけたところで障子の向こうから妙な気配を感じ、恐る恐るそちらを向いた俺はサーッと血の気が引いていた。

……あ、あき姉！

障子の向こう。ニンマリと笑みを浮かべたあき姉が親指を立てたかと思いきや、次の瞬間にはパシヤパシヤとフラッシュが煌いて目の前を白く染めていた。

「ひゃうっ」

「うひゃ——ちべたっ」

当然、突然の事に悲鳴を上げる悠は驚きのあまりめんつゆ入りのお椀を放り投げ、それは俺のハーフパンツへと一直線。

「ぬふふふっ……休憩中に何をイチャイチャしているのかな、二人とも」

「イチャイチャって……あっ」

そこで始めて自分のしていた事に気付いた様子の悠は、ぼんっと勢いよく真っ赤に染まった顔を両手で覆って恥ずかしそうに俯いてしまった。

「あらら、何を恥ずかしがっているのかしらね。さっきまで『あらんして』なんてやっていた子が、さ」

「あうあう……そ、それは」

「初々しいわね。見ているこっちが恥ずかしくなってくるじゃないの」

明らかにジト目で俺を見ながら呆れているあき姉も微妙に顔が赤いのは、悠の恥ずかしがり方が完全に“女の子”なところを見たからだろう。

かくいう俺も悠の姿に萌え死に……いえ、ごめんなさい。

「まあ、それよりも——ナオ、さっさと着替えなさいよ」

「あっ……と、そうだった」

悠のかわいさ(?)に見とれていたわけではないが、あき姉が余

計な事ばかり言うからスツカリ忘れていた。が、その言葉に誰よりも驚いていたのは俺の横にいる悠だった。

「あ、ああ……ご、ごめんなさいっ」

「気にしなくていいって。大体、悪いのはあき姉なんだからさ」
あまりの取り乱しように思わず身を引きそうになった俺の軽口に反応したのはあき姉だけで、「うっさいわね」と口では言っていたが悠の姿にさすがに困り果てたという顔をしていた。

「んじゃ、ユウは洗濯お願いね。ナオはさっさと着替えて仕事するっ」

が、すぐに軽くウインクをして早々に立ち去ってしまったあき姉を止める事も出来ず、残された俺はキョトンとしたままの悠と顔を見合わせて苦笑するしかなかった。

「そ、それじゃ、お願いできるか？」

「……う、うん」

とりあえずトランクスまで滲みているので穿き返る必要があるし、さすがに悠の前で下半身を晒す———というか、同性とはいえそんな事は出来ないし、恥ずかしい。

「んじゃ、着替えてくるから」

「は、はいっ」

妙に緊張した悠に正座して見送られ、何とも居た堪れない気分で居間をあとにした俺は部屋に戻って着替え——汗をかいたので全部着替えた——を済ませてから、悠に手渡して仕事へと戻った。

ただ、服を手渡したときの悠が、薄っすらと頬を赤くして潤んだ瞳をして嬉しそうだったのが気になったが、閉店までの間あき姉から散々からかわれ、その場にいた常連客からも色々突っ込まれて仕事にならずにボロボロだった。

仕事から解放されたアフターファイブは……って、俺はいつの時代の人だと一人ツツコミをしつつ、食後のお茶を飲みながら座椅子

でくたびれた身体を休めていると、悠がグラスを持って近づいてきた。

「なお君、洗濯物畳んでおいたから」

「いつも悪いな」

「いいよ。ボクが好きでやっているわけだし……それに、なお君疲れているでしょ」

さも当たり前のようにクスッと笑う悠は猫のイラストがプリントされたパジャマに身を包んで俺の隣へと腰を下ろし、テレビを点けてチャンネルを変えていく。

あき姉はデートだといって出かけていき、おばさんは一度帰ってきたがおじさんのところへ行ってしまった。近いのだから泊り込みで世話などしなくても思ったが、『夜の営み』をするほどの仲良し夫婦なのでそれもアリなのかと思ってしまった。

「それなら悠だって疲れるだろ」

「ボクより、お料理を作っているなお君の方が大変でしょ……手だって火傷してるし」

不意に俺の腕を擦る悠の手に驚いたが、その手は温かくて不快だとは思わなかった。寧ろ、疲れていた身体から“疲れの素”が抜け落ちたような、身体が軽くなったような感じがしてもう少しだけそうして欲しかった。

「大丈夫だって。無理はするつもりはなし、悠に心配をかけるような事はしないから」

「えっ？ あ——」

その優しさが心から嬉しかった。だからなのか、普段はしない事が自然と出来てしまった自分に驚いている自分がいた。

さらさら。

さらさら。

指先からむ艶のある髪を撫でながら、ふと、まだ風呂にも入っていないのに、今日一日働いて汗もかいているだろうに、どうしてこんなにサラサラとしているのかなと、何とも場違いな事を考えながらその感触を楽しむ余裕が出てきた。

「は、はうう……な、なお君」

「はははっ、頑張っている悠にご褒美だぞ」

などと言いながら、内心俺も楽しくなってきたので調子にのって撫でていたら次第に悠の息遣いが荒くなっているのに気付いた。

「んっ……な、なお……く、くすぐった、んっ」

「——えっ？」

何故か艶かしい声を出している悠に驚いた俺は手を止めたが、いつの間にか耳の辺りを撫でていたらしく、耳に俺の指が触れる度に声を出して俺の腕をすぎるように掴んでいた。

「わ、悪い——っ」

と、そこでハッと我に返ったように悠の髪を撫でる手を退けて身体を離そうとしたが、悠の手が俺の腕を離してくれなかった。

どうしたのか分からず、怒らせてしまったのかと最悪の事態を想像してしまったが、優の顔を見る限りではそうではなく、どこことなく恥ずかしさを隠して困惑しているような雰囲気だった。

少し俯いて顔を見られまいとしながらも、上目遣いで俺の様子を伺っている悠は手を放す気配もなく、更に腕を掴む手に力をこめて離すまいとしていた。

……悠。

その手から伝わってくる温もりの中に悠の思いがこもっているような気がして、優しい気持ちに次から次へと溢れてきて自然と、悠の髪へと手を伸びていた。

「ありがとう……悠」

だから、俺はもう一度悠の髪を撫でた。

今度は気をつけながら、ゆっくりと優しく、ゆっくりと慈しむように。

「ふあ……う、ううん……ボクだって、なお君に」

幸せそうに目を閉じて撫でられるがままに、優しい笑みを浮かべた口元から紡がれる声が俺の鼓膜を震わせていく。

「俺はいつも悠に助けられているし、これくらいしか出来ないけど――悠には感謝しているぞ」

「そ、そんな事……ボクの方が……ボクの方がっ」

言葉にならず、言葉を紡ぐ事が出来ずに、悠の口からは嗚咽がもれ始め、小さく震える肩を見ているのがつらくて、胸が張り裂けそうな思いが限界を超えてしまったとき――

「……な、なお……くん」

俺は堪らず、悠の身体を抱きしめていた。

驚いて息を呑んだ悠の上ずった声が耳に届いたが、今はこうしていたいと思った。怒られるならあとから怒られよう。だから、今は悠が泣かないでいいように、ただ笑って欲しいと思ったから。

「何があっても、俺は悠のそばを離れないから……だから、泣かないでくれ。俺は泣いている悠を見るのが――」

あの日を思い出してつらいから。

そう言葉にしたかったが、ゆっくりと俺の背中に回された腕に力がこもり、優は俺の胸に顔を押し付けるようにして更に身体をすり寄せてきていた。

「いや……ボクを、おいてか……っ……で」

「ああ、置いていけないから。俺はどこにもいけないから」
だから泣き止んでくれ。

俺はお前が笑っている顔が好きなんだ。お前の笑っている顔が本当に好きなんだ。

……そうか。

やっぱり、俺は『理屈』っぽいのかも知れない。何かにつけて悠の“せい”にして俺の気持ちは二の次になっている。

だから、伝えよう。

「俺が悠のそばにいたいんだ……俺が悠と一緒にいたから、ずっとお前のそばを離れない」

自然と紡がれた言葉は自然と溢れたもの。ただそれだけを聞けば愛の告白にも聞こえるなと思いつつ、俺は悠の身体を強く抱きしめた。

言葉にした事で胸の奥にあったチクリとする痛みが幾分かはひき、代わりに少しだけ幸せな気持ちが広がっていくのを感じていた。

「……な、なお……くん」

テレビから聞こえるドラマの台詞もどこか遠く、悠の息遣いだけが俺の耳に届いている。

目の前には悠の顔。

弾かれるように驚いて顔を上げた悠は目を丸く見開き、呆然と口を半開きにしたまま、俺の顔を見つめて信じられないものを見るような顔をしていた。

どこまで伝わっているのかは分からないが、これは俺の偽らざる気持ちだ。しかし、こう何も反応がないと怖いというか、俺の勝手な思い込みだったのではないかと思ってしまう。

「ま、まあ、一緒にいるのが迷惑——っ」

「そ、そんな事ないっ」

俺の言葉を遮るように悠が声をあげ、俺が自分の言葉を取り消そうと言葉を飲み込んだときと、ほぼ同時だった。

……何やってんだ、俺は！

さっき俺は自分に素直になって伝えようとしたのに、悠の言葉がないからって優しさにつけこむように、“なかった”事にしようとするなんて。

「すまん。今のは聞かなかった事にしてくれ」

「……えっ？」

意味が分からずに聞き返してくる悠の指が震え、徐々に力が抜けるように温もりが離れていくように感じた。

「あ、違うぞ。俺が言っているのは、『一緒にいるのが迷惑』とかって方だ——俺は悠と一緒にいたいのは本当の気持ちだからな、なっ」

「あっ……う、うん」

「悪い。どうも、俺って言葉が足りないみたいだな」

さすがにバツが悪くて苦笑する俺をキョトンとした表情で見つめて頷いていた悠だったが、クスッと噴き出しておかしそうに肩を震わせて笑い出した。

「何だよ、ったく」

「ご、ごめんね……ふふっ……ご、ごめ……っ」

だが、それは笑っているのではないと気付くまでに時間がかからなかった。

泣いている。

小さく肩を震わせて悠はまた俺の胸に顔を埋めて泣き出した。ただ、それはさっきとは違う涙……だと俺は思う。

そう、違う。

だって、その涙はとても温かく、俺の胸に深く、優しく沁みこんでいるから。

一夜明けて、本日も晴天なり。

時刻は午前六時半。起きるには早い時刻なのだが、嫌になるくらいのおっぱいな空から降り注ぐ日差しに睡眠を妨げられて目が覚めてしまったのだ。……ったく、海の家アルバイターが言う事ではないが、もう少し手加減しようぜ、太陽ちゃんよ。

「おはよう、なお君。今日は早いんだね」

「んーっ、はよ……ふぁあぁっ」

汗でベタつく身体をシャワーでスッキリさせようと風呂場へとやってきたが、ちようと悠が洗濯をしている最中だったようで、俺のTシャツを持って洗濯機へと入れようとしていた。

「ふふっ、眠いならもう少し寝てればいいのに」

「そうしかったんだが、暑くて目が覚めちまって……それに、夜中にどこかの馬鹿が火花してたから、それも気になってな」

「そ、そうだったの？」

どうやら悠はそんなものにも気付かずにくっすりとお眠りだったようで、何故か申し訳なさそうな顔をされてしまった。

「別にお前が気にする事じゃないって。砂浜で火花が禁止されているのに……ああ、一応見回りに行かなくちゃな」

「あっ、それならボクも一緒にいくよ」

ボトボトと洗濯かごから洗濯機へと豪快に流し込んだ悠は、手馴れた様子でボタンをピポパと押しながら洗剤を流し込み、慌しく動き回る悠が置いていかれまいと俺をチラチラ見ているのが面白くて、シャワーは帰ってから浴びればいいかなと思いつつ苦笑していた。

朝の散歩ならぬ朝のパトロールをしながら、砂浜にゴミが落ちていないかを見ながら歩く俺の隣を、同じようにキョロキョロしながらついていく悠は、何やらハミングしながら上機嫌だった。

「朝から元気だな、お前は」

「そ、そうかな」

朝の日差しを受けてキラキラと輝く髪を指にかけ、少し恥ずかし

そうに頬を染めてはにかむ悠にドキッとしてしまった俺は、そしらぬ風に顔を逸らしてゴミを探すフリをしていた。

……あ、あぶねえ。

夏は魔物です、姉さん。いや、姉さんなんてあき姉しかいないけど、正直今の悠は『女の子』にしか見えなかった。

さっきまで来ていたTシャツとハーフパンツという格好も男には見えなかったが、今のキャミソールにショートパンツ、ピンクのパーカーという女の子にしか見えない格好をしているのだ。

そのショートパンツの下に男物のトランクスは絶対に穿けないだろうと、心の中でツツコミをいれながら、俺はピンク色の妄想を浮かべそうになって慌てて振り払った。

「や、やっぱり変、かな？」

いつの間にか悠の事を見つめていたらしく、俺の視線から逃れようと身動きする悠の頬をさっきよりも赤く、潤んだ瞳が恥ずかしそうに俺を捉えたので力の限り首を横に振っていた。

「に、似合っているぞ。似合っているが……そ、そんな服持ってたか？」

「これは、その……あき姉さんが」
なるほど、納得。

悠がこんな服をチョイスするはずがないし、あき姉なら納得出来るのだが何故悠がそれを着ているのかが分からない。

「こ、これは……着なくなったお古だからあげるって」

見た目はそれほど“着古した”感じのしない服をチラッと見て、多分去年よりも更に女性らしい身体つきになっていたあき姉を思い出し、『着なくなった』のではなくて『入らなくなった』のではと直感した。

「そっか。まあ、今日は暑くなりそうだから、それくらいの格好がちょうどいいかもな」

「そ、そうだね」

「んじゃ、もうちょっと先まで行って帰るか」

「うん——きゃっ」

ただ、それでもどうして着替えたのかまでは分からず、深く考えなくても仕方ないと歩き出そうとしたが、砂に足をとられた悠が俺の腕を掴み、咄嗟に悠の身体を抱きしめていた。

「大丈夫か？」

腕の中、目をパチパチとして驚いている悠は俺と目が合うと弾かれように飛び退こうとしたが、腕に力をこめて俺はそれを許さなかった。

「こ、こら——危ないだろ。少しは落ち着けて」

「ご、ごめん……な、さい」

シュンツと俺の胸に顔を埋める悠の背中を撫でながら、自分の行動が自分でも信じられなかった。

……俺は、何をした？

離れようとした悠を俺は抱きしめていた。何故だ？ どうして、俺はそんな事をした？

分からないが、ただ腕の中にいる悠を見ていたら昨日の事を思い出して、とても愛しい気持ちになって……だから、自然と腕に力がこもっていた。

そうか——悠が離れるのが寂しかったから。

「大丈夫か？」

「……う、うん」

少し寂しいと思いながら、いつまでもこうしてはいられない。名残惜しい気持ちをグツと我慢しながら悠の身体を開放したが、悠は俺から離れようとはせず、ギュツとTシャツを掴んでいた。

「どうした、痛かったか？」

我ながら場違いな事を聞いているとは思った。だが、この状況を

楽しめるほどの余裕は俺にあるはずもなく、鼻先をくすぐる悠の髪からシャンプーの香りが、甘く漂う“悠”の匂いが、俺の理性をどんどん奪っていくのを我慢するのに必死になっていた。

「う、ううん……違うの」

シャツを掴み、更にすり付いてくる悠の吐息が胸をくすぐり、理性が一瞬にして飛びそうになってしまった。だが、こんなところで何をしようとしているのかと思う自分があり、辛うじて馬鹿な事をする前に留まれた。

「なお、くん……なんだか、やさしい……って、おもって」

それを言葉にするのが怖いような、一言一言を区切りながら言葉にして、悠はギュッと握っていた手を離した。だが、それだけで俺からは離れようとはせず、ただ静かに何かを待っているような……いや、待っているのだろう。

「悠の事が大切だって分かったから……だから、こうしたいと思った」

それは俺の偽らざる気持ちだ。

まだ、俺の気持ちを直接伝える事は出来ない。それは、解決しないといけない問題があるからで、こんな中途半端な気持ちでは悠を傷つけてしまう。

「あり、が……とう」

胸の中で震える悠の肩を抱き、心が据わった俺はかなり冷静さを取り戻していた。

……悠が好きだ。

男とかそんなものでは関係なく、『悠』が好きだ。

理屈じゃない。理屈じゃなくて、俺は悠の事が好きだってハッキリと分かった。

でも、大切だからこそ、『理屈』を抜きにして大切だからこそ、俺の言葉には責任があると思うから。男として……大切な責任があると思うから。

「さて、ゴミもないみたいだし……そろそろ戻るか」

「う、うん」

まだ伝える事が出来ない思い。だけど、今を手放してしまうのは嫌だ。

名残惜しそうに離れていく悠がシャツを離して彷徨うようにもう一度伸ばしてきた手を俺は握り、驚く悠の髪を優しく撫でて歩き出した。

「な、なお……っ」

驚きながらも俺に引かれるまま、少しよろけそうになった悠の身体を抱き寄せると、真っ赤な顔を俺に向けて信じられないものを見たと言わんばかりだった。が、俺は恥ずかしさと緊張で悠の顔を見る事が出来ずにいたら、クスッと笑う声が風に紛れて聞こえてきた。

……ありがとう。

そして、優しく握り返される手から溢れている心地よい“もの”を感じながら、俺達は一瞬顔を見合わせて笑い、清々しい空のような気持ちを胸に來た道をゆっくりと歩いて帰る事にした。

第四話…心のままに……。

さざ波が寄せては返し、心地よい母の胎内を思わせる律動を残していく。

星が煌く深遠なる空の彼方、遠き時代より数多に続く物語を見続ける星々に見つめられ、約束の口付けを交わす。

それは永遠を誓う口付け。

いつまでも、いつまでも、永久に共に……。

「ひょっとし、ナオー―ヒック、聞ってるのっ」

「聞ってるってば」

何か、全てが台無しになっている気がする。

この酔っ払い、今日はすでにビール三本で出来上がっているし、未だに追加して飲もうとしているし。大体、空腹で飲めば酔いが回りやすいのは知っているはずなのに、この人はお構いなしに風呂上りのビールを煽ってわずか三〇分でこの有り様だ。

「ちよつとは静かにしないと、悠が迷惑してるって」

「んー……そんなにやことは、んくっ……にやいですにやあ」

何故、猫語？

「だから、静かにしてってば」

「にやはははっ……」

「あ、あれ？」

クテツとテーブルに突っ伏したあき姉はそのまま静かになったかと思えば、規則正しい寝息を立て始めていた。

「寝たのかよ……ったく、人騒がせな」

と、頭をかきながら悠の方をチラッと見たが、テレビに夢中でこちらの様子などまったく気にも留めていなかった。

ある意味で恐ろしい集中力だと思うが、あそこまで夢中になるほどあのドラマって面白いのか？

『あの日のように、この手を繋いで』

ベストセラーとなった携帯小説が元になり、最近売り出し中の若手俳優が主演する事で話題になった恋愛ドラマで、悠のお気に入りらしい。

舞台は『日向町』という自然が溢れる町で、そこにある高校に通う主人公達のありふれた日常と恋愛模様を描いたドラマだと、悠が力説してくれたのを覚えている。加えて原作本まで渡されて読む事を強要されたのは、後にも先にもこの一度だけである。それほど、悠はこのドラマを気に入っているのだが、その理由がいまいち分からない。

さて、俺もドラマの続きは気になるが、その前に居間に転がるリビングデッド――ダジャレじゃないぞ――を片付けないとな。とりあえず、部屋にでも放り込んでおくか。

……。

……。

リビングデッドと格闘すること、五分。

ようやく勝利を収めた俺は疲れた身体を引きずって居間へと帰ってくると、ドラマは佳境を迎えていた。

砂浜で思い人である幼なじみの女の子へ告白するシーン。

羽陽曲折あり、互いの思いに気付いた二人は思いの丈をぶつけ合い、そして結ばれた。それは長い長いトンネルを抜けたような明るい未来へのスタートであり、原作でも最高に盛り上がったような場面である。不覚にも泣きそうになったのは内緒だが、ドラマの世界にどっぷりとはまっている悠は号泣しております。

「……っ……うう」

ある意味でそこまでのめり込んでくれたら、作り手とは嬉しいだろうなと思いつつながら、俺は悠から目が離せなくなっていた。

頬を伝う清らかな雫を指に絡め、ゆっくりと目を伏せてはまた一筋

の雫が頬を伝い落ちていく。白くなめらかな肌は少し上気したように朱に染まり、その姿はただそこにあるだけなのに美しく、絵画のような触れていけない美の境地を見たような気がした。

……って、大げさかな。

でも、不謹慎かも知れないが、今の泣いている悠は綺麗だと思う。いつもの悲しみの涙なら俺は何としても泣き止むように努力する。そのための労力など惜しくもなんともない。

「んっ……っ……」

そんな事を考えていた間にドラマはクライマックスへ。

砂浜での告白。そして、その思いを形にするべく、互いの唇を重ねて口付けを交わす。

そして、ゆっくりと水平線が夜と朝が混ざるように、白く光り輝きを放ちながら昇ってくる太陽の光に照らされて二人の姿が影となり、ドラマの主題歌と共にエンドロールが流れ始めた。

ドラマ自体はあと数話残っているはずだが、今日が最終回のような手の凝った作りだと思いながら、何やらテーブルの上を探すように彷徨う手にティッシュの箱を差し出した。

「ありが——」

と、そこで俺がいるのに始めて気付いたような、目を丸くした悠があうあうと口を動かして持っていたティッシュがはらりと落ちていた。

「——っ」

「はいはい、落ち着けて」

「ひにゅっ」

思いつきり動揺して立ち上がりとした悠の顔に、すばやく抜き取ったティッシュを押し当てて鼻を摘まむと面白い事に悠の動きがピタリと止まった。

……面白いな。

ティッシュに隠れた顔の下半分は見えないが、恥ずかしそうに目を泳がせる悠が面白くてもう少し遊んでいたかったが、そろそろかわいそうになったのでティッシュを離すと、慌ててティッシュを掴むと顔を逸らしてしまった。

「——もうっ、酷いよー」

時間にして数秒。あっという間に涙と鼻水を拭いた悠は、ぷんぷんと頬を膨らませて怒っていた。

それはもう『ぷんぷん』という擬音がピッタリくるような怒り方で、女の子みたいだなと思ってしまったのは仕方ない事だ。

「ごめんって。悠がかわいかったから、つい」

「——はうっ」

なので、こんなからかい方をしてしまう俺は最低かも知れないが、“つい”と言いつつも機会があればもう一度したいと思っている俺はどうかしていると思います。

「それにしても、悠はあのドラマが好きだな」

「え、あ——うん」

本当に嬉しそうに返事しちゃって。

「あと少しで最終回だな」

「そうだね……ちょっと寂しいなあ」

「んじゃ、DVDでも買えばいいじゃないか？」

「うーん……それも考えたんだけど、他にも欲しいものがあるから」と、思いをはせるように嬉しそうな笑みをこぼした悠は、俺の視線に気付いて恥ずかしそうに顔を伏せてしまった。

しかし、悠が欲しいものって何だろう？

普段から無駄遣いをするようなタイプではない悠は、必要なものでも吟味して買う妙な癖がある。ある意味で儉約家というのだろうが、とにかく一緒に買い物へ行くと恐ろしいほど時間がかかる。まるで女の子と一緒に買い物に行っているような錯覚すら覚えてしま

うわけで、最近では何かにつけて俺が避けていたので一緒に買い物へ行っていない。

「何買うつもりなんだ？」

「え、えっと……それは」

一瞬、口ごもって口を噤んでしまった悠は俺の顔をチラッと見て、「プレゼント」とだけ小さく呟いた。

「プレゼントって、もしかして俺のか？」

「そうだよ。ボクがプレゼントを贈るのはなお君だけだもんっ」
グッと拳を握って力説されても、ね。

「けどさ、プレゼントって誕生日だろ？ ドラマのDVDが出るのって半年とか一年くらい先だろうから、買う事は出来るんじゃないか？」

「そ、それはそうだけど……でも、他にも色々と、ね」

まだ何かあるような物言いだが、悠はそれ以上言いたくないのか口を噤んでしまった。

俺達がプレゼントを贈るのは誕生日だけで、昔はあき姉も一緒だったからクリスマスパーティーをしてプレゼント交換をした。しかし、あき姉が中学に進学してからはクリスマスパーティーを一緒にする事もなくなり、何だかんだでうやむやの内に誕生日以外でプレゼントを交換する機会がなくなっていた。

「なお君、どうしたの？」

「んっ？ あ、ああ……ちよっと、懐かしい事を思い出していた」

ぼんやりと昔を思い出していた俺を心配したのか、覗き込むように近寄ってきた悠の顔が目の前にあって驚いたが、取り乱す事もなく懐かしい話を口にしていた。

「……もう、何年もクリスマスパーティーしてないね」

「あき姉も店が忙しいから一緒に出来ないしな。かといって、居酒屋でクリスマスって……なあ」

さすがにそれを想像したら何だか寂しくなってしまう、悠は同情的な眼差しで苦笑して頷いていた。

「今年はどうなるか……寂しいクリスマスになるのかねえ」

「ど、どうなのかな」

「まあ、そうになったら寂しいもの同士で、久しぶりにクリスマスパーティーでもするか？」

「……えっ？」

俺としては冗談とも本気とも、どっちでもない“出来ればいいな”という希望を込めた提案ではあったが――

「や、やるっ」

俺の予想以上に悠が食いついてきた。

「ゆ……ゆう？」

「ボク、なお君と一緒にクリスマスパーティーしたいっ」

いつもの悠とは比べものにならほどのすばやい動きで俺の前にちよこんと座り、グツと身を乗り出して興奮した様子で俺の肩を揺すっていた。

「わ、分かったから、落ち着けっ」

「……えっ？ あ――あわわっ」

さすがに驚きを通り越して呆れてしまった俺は豹変した悠をどうしようかと思ったが、すぐにいつのも悠に戻って真っ赤な顔でズサーッと俺から離れてキョドっていた。

……はああ。

何とも今日は普段は見られない悠が見られてお得だなと思いつつ、悠を落ち着けるためにどうすればいいかなと悩んでいたらオズオズと悠の方から近づいていてきた。

「あ、あの……なお、くん」

「んっ？」

「……お、おこってる？」

四つんばいで上目遣い。

この子は俺を萌え死にさせるつもりなのか。

「怒ってないよ。今日は中々面白い悠が見られたから満足だ」

「も、もうっ」

ふわっと朱色に染まる頬を膨らませて、拳を握って俺の胸を叩く悠は本当に恥ずかしそうで、俺は叩かれても痛くない拳に苦笑しがらされがままでいた。

「やっぱり、なお君は意地悪だよ」

「そうか？ 俺はジェントルマンだと思うが」

「……ジェントルマンは、自分でジェントルマンって言わないと思うよ」

悠にしては辛辣な答えが返ってきたと思ったが、その顔はおかしそうに笑っていた。

「笑う事ないだろ」

「だって、ふふっ……なお君、面白い顔してるんだもん」

それは向日葵のような笑顔。

花が咲いたようなとはよく言ったものだと感じつつ、その笑顔に触れてみたいと手を伸ばしていた。

「え、えあ……」

さすがに俺の行動が予想外だったのか、驚いてオロオロしている悠は後退しそうになったが、悠の腕を掴んで少し強引に引き寄せた。
「――っ」

何も考えていなかった。

ただ、無性に悠の温もりが欲しかったと言えいいのか、あるいは性衝動にも近いものだったのかは分からないが、とにかく悠が“欲しかった”のは事実だ。

「……な、なおくん」

「すまん。よく分からんが悠を抱きしめたいと思った」
率直な思いだった。

戸惑う悠の声を聞きながら自分勝手な事をしているのは十分に承知しているつもりだった。でも、どうして離す気にはなれなかった。思えば、『理屈』を抜きに考えるようになってから、どうやら予

想以上に悠を“欲している”事に気付いてしまった。

だが、これは俺の独りよがりだ。

悠の気持ちなど無視したもので、悠の性格を逆手にとった最低なやり方だと分かっている。だが、分かっているにも悠が欲しくなる。温もりが欲しくなる。

最低だ。

こんな事なら『理屈』抜きに考えるのでなかった。でも、一度味わった蜜は忘れられない。

「そ、そう……なの？」

「ああ、そうだ。俺は悠が……悠の事が――」
駄目だ。

そこから先はまだ言っては駄目なんだ。

「大切だから……だから、無性に抱きしめたくなった」
「……なお君」

言い訳なんてみつともない。でも、俺はまだ自分が許せない。

悠の心をトラウマとなった出来事から開放してやるまで、俺は絶対にこの思いを告げてはいけない。

「へ……変な、なお君」

だから、俺の気持ちを知らない悠は困惑して笑うしかない。

「変なのかも知れないな、俺」

「な、なお君……？」

「こうして悠と一緒にいると、ドキドキするんだ」

その言葉に悠が息を呑み、じっと次の言葉を待つように少し恥ずかしそうに俺の顔を見つめて離さない。

「ま、まだ……ハッキリとは言えないが、その、悠と一緒にいるのが……こうしているのが、好きなんだ」

ある意味で先ほどの決意を無駄にしそうな、告白に近い事を言っているのは分かっている。暴走しそうになる気持ちを留めながら、心とは違う事を言わなければいけない苦しさ。

ドラマとかはよくあるシーンだが、本当に遭遇するとつらいもの

だったんだな。

「ほ、ほんと……に？」

「ああ、本当だ。俺が悠に嘘を吐いた事があるか？」

「……まったく、ないとは言いきれないけど」

こんなときに真面目に答えなくていいんだよ、馬鹿。

「でも、今のなお君は嘘……吐いてないのは、分かるよ」
ほろり、ほろり。

「ゆ、悠っ？」

「あ、あれ……なんで」

ぽろぽろ。

ぽろぽろ。

「——っ……嬉しいのに……ボク、嬉しい、のに」

溢れ出す大粒の雫が頬を伝い、ほろほろと俺の胸へと沁みこんでくる。

「ボクも、なお君と一緒にいるのが好きなのっ」

止められない、止まらない大粒の雫をそのままに、俺の胸にすがり付くようにして顔を埋めた悠は、声を押し殺して嗚咽を漏らし、細く壊れそうな肩を震わせていた。

「こんなときくらい、声出してもいいんだぞ」

「だって、だって……」

「どんな涙だって、俺は全部受け止めてやる。だから、思いっきり泣け——悠」

その言葉を合図に、悠は弾かれたように声をあげて泣き始めた。それは今まで我慢していた“何か”を吹っ切るような、何かを押し留めていたかのような涙は、今まで感じたこともない感情が溢れる暖かい雫だった。

「どこに……どこにも行かないでっ……ボクだけのそばに、んっ——」

「いて欲しいのっ」

それは愛の告白に近いものだった。

俺の言葉に出来ない思いを悠が紡いでくれたようで、ただ愛しくて、泣き崩れる悠の身体を優しく抱きしめる。

「ああ、どこに行かない」

「やく……っ……そく」

「約束だ。俺は悠のそばにいるから」

言葉にするのは簡単なようで難しい。俺の思いを全て言葉にしているつもりでも、何かが足りないような気がしてしまう。

……悠、好きだ。

だから、今は言葉に出来ない思いを胸に込めて、ただただ俺の気持ちを含めて、悠のそばにいる事だけを誓いながら優しく包むように抱きしめていた。

水平線の向こうから昇った太陽は気付けば頂点に達しようとしていた。

お店は今日も大繁盛。店内はごった返して満席状態で、今日はお客さんが昼の時間だけ手伝ってくれるようになったが、それでもお客さんを捌くのが一苦労。

「お好み焼きとたこ焼き、焼きそば大盛り出来たよっ——ごめんっ、誰がレジお願い！」

「あっ、ボクが行くよ」

店内を縫うように駆けていく悠がチラッとこちらを見て、ふわっと花のような笑みを浮かべて小さく手を振ってレジへと向かい、俺の方へと走ってきたあき姉が呆れたようにジト目で睨んで料理を運んでいく。

さつきからこれを何度繰り返したか分からないが、今日の悠は朝からとても機嫌がいい。いや、いつもと変わらないと言えばそうかも知れないが、どこかオドオドとしたのがなくなったような、スッキリとした笑顔を見せてくれるようになった。

「今日の悠ちゃんはいつも以上に元気だな。おう、なお坊」

「まあ、そうですね」

と、気付けば目の前にランニングシャツにジャージとサンダル。ぽっこりお腹がトレードマークの雅さんが立っていた。

「元気なのが一番だっ、はっははは！」

豪快の一言で表す事が出来るこの御仁は、近くの漁港でこの辺一帯の猟師を纏める猟師長と呼ばれる人で、俺と悠は子供の頃からここで手伝いをしているので親戚のおじさん感覚だったりする。

「それに、なお坊も随分と様になってきたな」

「そうですか？」

「ああ、正直今年は駄目かと思ったが、さすがはガキの頃からこの手伝いしているだけあって身体が味を覚えているんだな、がはははっ」

この人にそう行ってもらえるのは正直嬉しい。

初日に俺の作った料理を残したのは何を隠そうこの人だ。でも、毎日のように顔を出しては注文してくれるのは嬉しくて、頑張っ作っていたらようやく少しは認めてくれたらしい。

「あ、ありがとうございますっ」

「だけど、まだまだ精進が必要だな。今度、うちの船に乗ってみるか？」

「あ、えっと……」

「がはははっ、そう難しく考えるな」

豪快な笑い声を残し、勝手知ったるとばかりに調理場の方へ回ってビールを持っていく雅さんに苦笑しつつ、焼きそばをお皿に盛って青海苔と鰹節をかけて完成。

「焼きそばできたよっ」

「分かった。ナオ、餃子とビールの追加お願い！」

「了解」

一つ出来ては一つ注文が入り、おばさんも手伝ってくれているのだが誰も動きを止める事がなく、店内を縦横無尽に駆け回っていた。

……。

……。

それから暫くの間は満席が続き、気付けば午後二時を回っていた。店内は空席が目立つようになり、カキ氷やジュースが売れ始める時間帯。つまりはおやつタイムです。

「っ、疲れた……」

「私も、さすがに……」

微妙に柱にもたれかかったあき姉は虚ろな目で宙を見つめてへらへら笑い、おばさんはもう病院へと帰って行った。

「しかし、ユウは元気だねえ」

「そうだね」

鉄板を掃除しながら店内をパタパタと小走りに駆け回る悠を呆れ半分、微笑ましそうに見つめるあき姉は不意に俺の方に向いてニンマリと口角を上げる。

何だか嫌な予感がしますが、とりあえず聞き流す事にしよう。

「もしかして……ユウってば、女になったのかしら」

「ぶっ——な、何っ？」

いきなり何を言い出すかと思えば、この人は酔っ払っているのかよ。

「ふふっ、冗談だって。例え、昨日の夜にユウが泣きながらナオにすがっていたとしても、私は何も見てないから」

「いや、見てるし——ってか、マジで？ うわああっ」

にゅふふつと不気味な笑い声を残して、「んじゃ、休憩行ってくる」と裏へと消えていくあき姉に色々と説明したかったが、ふと目が合った悠が笑顔でこちらへ小走りに駆け寄ってくるのを見て、何だかどうでもいい気持ちになっていた。

「あき姉さんと何を話していたの？」

「え、いや……あの」

さすがに話すのも躊躇われたのでどうしようかと思ったが、一瞬悲しそうに目を逸らした悠に心がチクツと痛んだ。悠に隠す必要はないし、悠に隠し事をするのは俺も好きじゃない。

「実はな――」

だから、素直に話す事にした。

「はうう……み、見られてたの？」

案の定、悠は真っ赤になって恥ずかしそうにトレイで顔を隠してしまったが、スツと少しだけ下げて潤んだ瞳を向けたかと思えば、困ったように視線を彷徨わせて落ち着きをなくしていた。

「別に何かを言われたわけじゃないし、俺は気にしてないから」

「……なお君」

「それに、昨日言った事は俺の本心だから変えるつもりはないからな」

さすがにこれ以上は俺の方が恥ずかしくて鉄板の掃除を再開したが、悠はその場から動く気配がなく、チラッと見上げた俺と視線が交差し、互いに目を逸らしていた。

……ま、まずい。

思いつきり意識して顔が熱い。

今更ながらに告白紛いの事を言ったのを思い出し、心が熱くたぎるような高揚感に酔っていたらお客さんが入ってきた。

「いらっしやいませ」

すぐさま悠は接客モードへと入り、一瞬俺とまた目が合った。

しかし、今度は優しく嬉しそうな笑みを浮かべてパタパタと小走りに走っていき、そのうしろ姿を眺めながら俺は幸せな気持ちを噛みしめていた。

それから瞬く間に時間は過ぎ、現在は夕食中。

今日の担当はあき姉なのだが、何だか機嫌が悪くてテーブルの上にはおにぎりやインスタントの味噌汁が並んでいるが、悠が申し訳なさそうに作った玉子焼きが一番おいしそうに見えていた。

「ったく、何なのよっ」

「まあまあ、少しは落ち着いてってば」

さっきからこれを何度繰り返しただろうか。

そう思いながらいい加減疲れたなと悠と顔を見合わせて苦笑し、ため息を吐いていた。

「あいつ等、今度来たらぶっ飛ばしてやるんだから！」

「だから、それは駄目って雅さんに言われたでしょ」

「うっさい！ あいつ等がユウにちょっかい出したのが悪いのよ。私のかわいい妹を泣かすヤツは尻穴から手突っ込んで——」

「だーっ、女の子がそんな事言っちゃ駄目でしょうがっ」

興奮して“地”が出ているあき姉は指をワキワキとさせて嬉しそうで、悠は微妙に困惑した笑みを浮かべて俺の横に近寄り、テーブルの下でそっとシャツを掴んでいた。

優しく悠の手に俺の手を添えると、驚いて俺の顔を一瞬見たがほのかに赤く染めた頬を更に赤くして恥ずかしそうに微笑んでいた。

「あき姉、ちょっと落ち着いてよ」

「ナオは悔しくないのっ？ ユウの事を……ユウの事を馬鹿にしたあいつ等をっ」

あき姉が怒っているのは、昼間に起きたちよつとした騒動の事で、その被害者である悠以上に怒ってさっきからビールをガンガン飲んでいるのだが一向に酔う心配がない。というか、ますますテンションがあがって危険な状態になっていると思うのですが。

ただ、あき姉に一言だけあるとすれば、俺の腸は未だに煮えくり返っている事だ。多分というか、あいつ等を見つめたら何もしないでいる自信がないほどに怒りに俺の胸は満ちている。

それは、慌しい昼が終わってあき姉と悠が休憩を済ませ、最後の俺が休憩を済ませて店内に戻ったときに起こった。

時刻は午後五時前。

店内は数名のお客さんがカキ氷をおいしそうに食べ、昼に続いて雅さんがいつの間にかやってきて枝豆をつまみにビールを飲んでいた。あき姉は開いたテーブルを掃除しながら備品のチェックをし、悠はカキ氷の機械を前にしてお客さんの相手をしていたが、そこに現れたのがいかにもな風貌と雰囲気をした三人組の男だった。

明らかに地元の人間ではないのはすぐに分かったが、別段珍しい事もでないからそのまま無視をしようとした。だが、突然悠の悲鳴が上がり、店内は騒然となった。

『汚したんだから、少し付き合えよ』

悠が持っていたカキ氷シロップの容器から跳ねたシロップの雫が男の腕にかかり、それで男が悠の腕を掴んで声を荒げ、悠は必死に頭を下げて謝りながら手を離して欲しいと訴えていたが、男はまったく聞く耳を持っていなかった。

確かにシロップをかけた悠が悪いかも知れない。

だが、腕に付いたシロップは拭き取ってしまえばいい。幸い、水着や着ているシャツにはシロップは付着していなかったし、それほどまでに目くじら立てて怒るほどでもないと思う。しかし、あれは店員とお客の立場を分かった上での卑劣なやり方で、他の男達もそれを止める事もなく、ただ面白そうに笑いながら悠に汚れた責任をとるように迫った。

さすがにその瞬間には俺の怒りは頂点に達するどころか、怒りを通り過ぎて殺意に近い感情を持つようになっていたが、スツと俺を制するように伸びた腕に驚いてそちらを向くと、任せといてとばかりにあき姉が悠を助けに行った。しかし、それは事態を更にややこ

しくした。

腕を捕まれたままの悠を引き剥がそうとするあき姉にも男達が気安く話しかけ、それを払いのけていたあき姉を見かねたのか、悠が悲痛な思いで叫んだ。

『こいつ、男かよっ——気持ちわりい』

そして、悠の腕を掴んでいた男が蔑むような、明らかに嘲笑うような口調で馬鹿にし、その声に他の男達も一緒に笑い始めたとき、悠は小さく肩を震わせて俯いてしまった。

——泣いている。

うしろ姿しか見えなかったが、それを見たときに俺の中で何かが切れた。怒りに震える拳を力の限り握り、悠を泣かせたヤツに向かって駆け出そうとしたとき、またしても俺の前にスツと立つ人影があった。

『おい、兄ちゃん達』

それは今までビールを片手に飲んでいた雅さんだった。しかし、そのときばかりはその背中が恐ろしいまでに威圧的で近寄る事も出来ないと感じ取った。

だが、馬鹿なのか大物なのか知らないが男達はそんな雅さんを嘲笑って茶化し、癪に障る笑い声だけが辺りに響いていた。

が、男達の運命もそれまでだった。

これだけ目立つ行動をしていれば人も集まってくる。

『この子等はな、俺にとって是我が子も同然なんだ。その子が泣いているとあっちゃ、俺も黙ってはおれん』

あくまでも言葉尻が優しい雅さんだが、その言葉の中に怒りがありありとあるのは俺やあき姉は気付いていた。それは初対面の男達にも分かったのか俄かにどよめき、悠の腕を離して逃げようとしていたが、気付けば男達の背後には一〇人近い屈強な男達が逃げ道を塞いでいた。

その顔ぶれはアクアマリンの常連であり、雅さんと同じ猟師の人達で、男達を両脇から抱えるようにして引きずっていき、そこで騒動は終結した。

まったく活躍していない俺だが、あのあと姿を見なかった男達が少し気になったが、それよりも悠の腕を掴んだ男だけは一発ぶん殴りたかった。

「ちょっと、ナオツ」

「……えっ？」

いきなりガクツと揺すられて我に返った俺は、目の前にふて腐れたあき姉の顔があった事に驚いたが、それ以上にむすっと頬を膨らませた悠に掌を抓られていた事に驚いてしまった。

「聞いてなかったでしょ」

「な、何が？」

「だから、あいつ等の事よ。許せないでしょっ？」

そこまで言われて理解した。

「許せるわけがないだろ。でも、悠が嫌がるような事はしたくない」「な……なお君」

驚いたように目を丸くしてすぐに優しく目を細める悠は、俺の手を優しく撫でて“ごめんね”と優しく微笑む。

悠は望むなら、俺はこの拳を揮う。しかし、悠が望まない事はしないと誓っている。

だから、これでいい。

そう悠が言っているようで、俺は撫でられる手にもう一度手を添

えた。

第五話…ただ、愛しくて……。

昼間の『ナンパ野郎事件』で晩酌のペースが乱れたあき姉は早々にダウンして今は部屋でいびきをかいて寝ております。

確かに昼間のは許せる事はなく、あき姉の怒りはもったもた思ふ。まあ、あそこまで泥酔するまで酔っ払うのは多分、自分が何も出来なかった事にも怒っているのだろう。あれで俺達の姉貴的存在だから、俺達の事を守るのが当たり前になっているから仕方ないかも知れないけど、そろそろ大人しくなった方がいいと思うけどな。お嫁とか……ああ、相手が相手だからもしかしたら婿入りになるかな。あき姉って男気溢れているからね、男以上に。

「あき姉さん、大丈夫かな？」

「まあ、明日には忘れてケロッとしていると思うぞ」

小さく嘖き出して笑う悠は苦笑しながら色々と思いつているのだろうが、あき姉は昔からちよつとした騒動を起こす事があったが、翌日には何事もなかったかのように平気な顔をしていた。

一晩寝たら全部リセットされるあき姉が羨ましいと思いつながら、その騒動にいつも巻き込まれていた俺と悠は苦しい思い出ばかりです。

「はい、どうぞ」

「お、すまん」

コトツと置かれた麦茶のコップをグイッと煽っていくと、冷たい麦茶が喉を通っていく心地よさに身体から嫌な事が流れ出していく感じがしていた。

今日も一日働いて疲れた身体を癒すのは食事とお風呂だが、こうして誰かと一緒にいるのも十分な癒し効果があると思う。それに、かわいらしい悠のパジャマ姿——本日は子犬のイラストです——は一服の清涼剤としての効果は十分にあります。

「はあ……」

「ふふっ、おかわりする？」

無言でテーブルに置いたコップを悠の前に差し出すと、おかしそ
うに微笑んでから麦茶を注いで、そっと俺の前へ置いてまた微笑む。
「何だか楽しそうだな？」

「そ、そう……かな」

薄っすらと頬を朱に染めて俺から目を逸らし、コップの淵を指で
なぞって落ち着きなくしていた。

まあ、このまま聞いても悠は適当にごまかして答えてはくれない
だろう。ならば、悠の本音を聞くためにも何か策を練るしかない。

「ねえ、なお君。どうしたの？」

「いや……悠が何を考えているのかを知りたいと思って――はっ」
何を口に出して言っちゃってんだよ、俺！

「何って……し、知りたいの？」

どうして耳まで赤らめて恥ずかしそうに指を付き合わせて、俺を
上目遣いで見つめますかね、この子は。そんな姿を見たら聞きた
くてお兄さん我慢できなくなっちゃうでしょうが。

「悠が教えてくれるなら、俺は知りたい。でも、無理にとは言わ
ないから言いたくない事は言わなくてもいいからな」

「やっぱり、なお君は優しいね……ボク、胸がドキドキしちゃうよ」
お兄さんはさっきからドキドキしていますよ。

「あ、あのね……えっと、その、わ、笑わない？」

「え、あー……それは聞いてみないと分からない、かな」

「……ふふっ。やっぱり、なお君は優しいよ」

面白そうに、おかしそうに、悠の瞳は俺を見つめてはにかむよう
にクスクスと笑っていたが、スーッと息を吸い込んで静かに吐いて
暫く目を閉じていた。

……かわいいな。

ちよっと場違いな感想を抱いているのは重々承知しているが、目

を閉じて少し恥ずかしそうに頬を染めている悠をかわいいと言わずして何というか。

それから時間にしては数秒から数十秒の間、悠を眺めながら幸せな気持ちを胸いっぱい感じていたら、ふっと目を開けた悠とバツチリ目が合った。

「は、はわわっ」

案の定というか、多分さっきの精神統一がまったくの無駄になった感が、ありありとあるのだが気にするまい。というか、アタフタする悠がかわいくてもうちよつと見ていたと思ったのだが、意外とすぐに落ち着きを取り戻した悠はすーはーと大きく息を吸って吐いて、小さく頷いてガッツポーズ。

かわいい。恐ろしいくらいにかわいいぞ、悠！

「あ、あの、ね……なんだか、なお君が……旦那様に、その、見えちゃって」

何て別の事を考えていた俺は、一瞬悠の言葉が右から左へ抜けていきそうになったが、抜けきる前に引っ張って脳内でもう一度再生してみた。

……だ、旦那様？

聞き間違いでなければ、確かに悠はそう言った。俺の事を『旦那様』って言ったよな。

「え、えっと……あ、あああ、あの、なお君？」

「――っ、ああっ……す、すまん」

ヒラヒラと揺れる白い蝶々が目の前を飛んでいると思ったら、それは男の手とは言いがたい白くて小さな白魚のような悠の手だった。そして、心配そうな悠の顔が目飛び込んできたときにドクンツと胸が高鳴り、無性に悠が欲しくなったがグツと堪えて手を引いた。

「ご、ごごご、ごめんね——変な事言っちゃって。あの、わ、忘れてっ」

しかし、俺が難しい顔をしていたのを勘違いのか、今にも泣きそうな顔で両手をバタバタさせて悠が懇願してくるが、俺はその姿があまりにもかわいくて、面白くて、ただ愛しくて、俺はゆっくりと首を振っていた。

「違うって。ちょっと驚いたただけだから」

「……で、でも、ボクが変な事言ったから」

「変な事って何だ？　俺は旦那様って言われて……その、嬉しかったぞ」

率直な感想だが、ちょっと恥ずかしい。

何を甘々なバカップルみたいな事をやっているのだと思いつながら、悠が相手ならこれもいいかなと思っている自分がいることに驚いていた。

そして、そう思っているのは俺だけではないようで、最初は驚いて目を丸くしていた悠も次第に嬉しそうに顔を綻ばせて頬に手を添えていた。

……いいな、これ。

この雰囲気は自分で想像しても恥ずかしいが、『新婚さん』っぽくないですか？

「俺が旦那様なら、悠は若奥さん……か」

「な、ななな、なっ」

言葉にならないとこの事か。

瞬間湯沸かし器の如く真っ赤になった悠は言葉にならない様子で、壊れたテープレコーダーのように同じ言葉を繰り返しているだけ。

「落ち着け、ハニー」

「ハ、ハハハ、ハッ」

やばい。ちょっとツボに入っちゃった。

「ごめんごめん。ほら、落ち着いて深呼吸して」

「は、はうう……すーはー」

さすがにこれ以上は危険そうだし、このままでは話が進まないからひとまず落ち着けよう。

……。

……。

それから五分ほどで落ち着きを取り戻した悠は麦茶の入ったコップを両手で掴み、コクコクとかわいらしく喉を鳴らして飲み干していた。

「あうー……おいしい」

ぷはーっと一息吐いた悠はかわいらしい笑顔でコップを置いたかと思えば、少し頬を赤く染めておどけるようにべーっと舌を出していた。

「なお君って、いつもは優しいのに、ときどき意地悪になるよね」

「ごめんって。機嫌直してくれってば」

何だか痴話喧嘩したカップルのような会話だなと思いつつ、少しふて腐れている悠の機嫌を直すにはどうしたらいいかと考えたが結局思いついたのは一番シンプルな作戦だった。

「なあ、悠」

「何？ 意地悪なお君とは――ひにゃっ」

ツンツと顔を逸らして怒っているのをアピールする悠を強引に抱き寄せryと、かわいらしい悲鳴をあげて俺の胸へと収まっていた。「意地悪なお君がなんだって？」

「……あ、あう」

目をパチクリとして何が起こったのか分からない様子の悠だったが、子犬のような円らかな瞳を俺に向けて今にも泣きそうな顔をしてぐしゅぐしゅと鼻を鳴らしていた。

「ごめんごめん。俺が悪かったから泣かないでくれよ」

「な、泣いて……ない、もん。泣いてなんか……」

と、言いながら泣きそうになっている悠の髪を撫で、頬に手を添

えて前髪をかき上げて露になったツルツルの額を突付いていたら、俺の行動を不思議そうな顔でキョトンとしていた。

「悠のおでこって、気持ちいいな」

「も、もうっ」

「ははっ、そんなに怒るなって。でも、本当に気持ちいいと思うけどな」

ツルツルのおでこって剥きたてのゆで卵みたい。ほっぺたはマシユマロみたいだし、悠の顔は食べ物だらけだなと考えつつ、ふとその肌に触れてみたという衝動に駆られてしまった。

無論、指では今も触れているので、『唇』で触れてみたいのだ。

しかし、そんな度胸が俺にあるわけもなく、ただ指先で軽く触れながら傷つけないように、優しくその感触を楽しむ事で欲求を満たそうとしていた。

「な、なお君……く、くすぐったいよお」

「そうか。なら、俺にもやっていいぞ」

「……えっ？」

自分でも何を言っているのか分からなかったが、俺以上に驚いている悠がポカンと口を開けていたが、ゆっくりと悠の指が俺の顔に触れていた。

「なお君の肌も……ツルツル、だよ」

恐る恐る、ツンツンと触れる指先がくすぐったくて思わず笑いそうになったが、悠の顔はこれまでにないほど緊張して強張っているのが目に入り、俺は心の中で苦笑していた。

何とも恥ずかしい事をしているのは分かっているが、本能が悠を求めてやまないのだ。確かに自分の気持ちを伝えたいと思うが、ケジメをつけないと告白する事が出来ない。

だけど、俺は悠に触れたい。感じたい。ただ、それだけなのだ。

「あ、こら。俺のは触っても、ヒゲとかでチクチクするだけだろ」

「――あっ、ほんとだ」

頬をツンツンしていた悠の指を顎へと導くと、少し驚いたような

声を上げて顎をスリスリと撫でていた。その動きに合わせて声をあげる悠が楽しそうに顎をスリスリとしていき、俺も悠の顎を優しく撫でていく。

……ツルツルだな。

俺と同じ男で、歳も一緒。なのに、こいつはヒゲらしきものが一本も生えていない。というか、産毛すらほとんど目立たないほど毛が薄く、腕や足は毛の処理が必要がないくらいで、女子から羨望と嫉妬の視線を受けていたのは記憶に新しい。

「な、なお君……く、くすぐったいにゃあ」

まったく予期せぬところから核弾頭が直撃。

「ゆ……ゆう？」

「んっ……ボクは、ねこじゃないにゃよー」

多分、冗談でやっているのは分かっている。

しかし、俺の中で理性が崩れそうになり、必死に押し留めている状況です。これ以上の攻撃がきたら、俺は多分悠が嫌がっても劣情に負けて求めてしまいたいそう。

だけど、もう離れる事は出来ない。

シャンプーの香りが鼻腔を容赦なく刺激して俺の脳内を悠一色に染めていく。だから、もっと近くで、もっと悠を感じたい。

「もう……くすぐったいって言って——んっ」

「——っ」

ちよつと拗ねたような、甘えるような、鼻にかかった声で胸の中で身動ぎした悠は勢いよく顔を上げ、危うくぶつかりそうになって何とか交わしたが、頬——厳密には唇の近く——に何かが触れる感触があった。

「ゆ、悠大丈夫か？　どこか怪我してないか？」

だが、そんな事を気にしている場合ではなかった。俺の頬に“何か”が触れたのなら、悠も同じだと言う事だ。もしかしたら怪我でもしているかと思ったら、そこには目を見開いて呆然とした悠が、唇に指を当てて震えていた。

……も、もしかしてっ？

俺だって馬鹿じゃない。色々考えて真っ先に思い浮かんだ答えはすぐに排除した。そうしないと、俺が平静を保てないと思ったからだ。でも、目の前で呆然としている悠を見ていたら逆に落ち着いている自分に気付き、今度は悠の事が気になってしまった。

「な、なあ——悠」

「ひうつ」

案の定、悠は驚いて俺から離れようとしたが、咄嗟に身体に腕を回してその自由を奪った。

「な、なお君、は——離してっ」

「どうしてだ？」

「だ、だって……ボク、ボクッ」

俺の顔を見ようとはせず、必死に俺の腕から逃れようとしている悠。いつもの悠からそれほどでもないが、取り乱している悠は俺の腕を払い退けようと必死で、押さえているのだがやっとだった。

さすがは『男』だというのをこんな形で実感するとは。

しかし、このままでは話にすらならない。

「悠っ」

だから、少しだけ俺は意地悪になろう。

悠が素直になれるように、俺が頑張らなくていけない。

「——っ」

「俺は怒ってないし、嫌でもなかった。だから、そんな顔をしない

でくれ」

俺の声に、少しだけ大きな声に、ビクッと身体を震わせて顔を上げた悠は、目にいっぱい涙を溜めて唇を痛々しいほどに噛みしめていた。

「な……なお……っ」

本当に泣き虫だな、悠は。

「怒って、ない……の」

いや、俺が泣かしてばかりなのか。こんなにも好きなのに、それを言葉に出来ないもどかしさが俺の行動を矛盾させる。

「いつまでも、泣いていると怒るぞ」

言葉とは裏腹に俺の気持ちは落ち着き、ゆっくりと悠の顔へと手が伸びていく。

「なお……んっ」

頬を撫で、顎から首筋へと滑る指先を感じ、悠の唇から漏れる吐息が胸をくすぐっていき、俺の手を求めるように悠は頬を寄せてきた。

その姿があまりにも自然で、俺は誘われるままに悠の頬に手を添えると、ゆっくりと悠は目を閉じてシャツをキュッと握り、一筋の雫を溢れさせていた。

「ご、ごめん……ボク、やっぱり……なお君に謝らなくちゃ」

「謝るって何をだ？　俺は怒ってないって言っただろ」

「で、でも——なお君の唇に、ボクはっ」

俺の手に頬を寄せて真っ直ぐに見上げる瞳は涙で濡れ、溢れ出た雫が頬を伝い、俺の手を濡らしながら尚も謝る悠の言葉に、俺はある疑問を——というか、勘違いを見つけた。

「なあ、悠。お前は、その……どこに、当たったと思っているんだ？」

「……えっ？　ど、どこって、あの、えっと……なお君のここ、でしょ」

と、白く細い指で俺の唇に触れた悠は、ふわっと頬を赤くしてオ

ロオロとし始めたがその様子を面白がっている場合ではなく、俺は悠の手をとってその場所を示した。

「ここだ。悠の唇が当たったのはここ——残念だが、悠の考えている事は起こっていない」

唇の斜め上数センチのところ。ちょうど鼻の横辺りを悠の唇が掠っただけなのだ。

多分、悠は俺の唇に当たってしまったと思い、それで俺が怒ると思ったからあれだけ取り乱していたのだろう。

「……う、うそ」

「嘘じゃない」

「ほ、ほんと……に？」

「くだい。そこまで言うなら——」

あまりに頑なな悠にちよつとだけ胸がざわついた俺は、悠の顎に手を添えて顔を近づけた。

「——っ」

軽く触れるだけ。

一瞬、唇を奪いたと思った。だが、それをやってしまえば悠に嫌われてしまうと思い、おでこへと軽く口付けをした。

「あにゃ……な、な、にゃ、な」

「悠のおでこはツルツルしてゆで卵みたいだな。よし、『たまでこ』と名づけよう」

「にゃっ……ちょ、な、なお君っ」

悠は何が起こったのかを理解してパニック状態で、俺もドキドキして意味の分からん事を口走っているし。

「次から怒ったら、たまでこにチューするからな」

何をしているんだろっかな、俺達は。

ただ、もう一度『たまでこ』に触れてみたい衝動に駆られているが、まずは悠を落ち着けるのが先決だろう。

まあ、俺も落ち着く必要があるかな……心臓がバツコンバツコンうるさいし。

……。

……。

それから暫くして落ち着きを取り戻した俺は、ぼんやりとテレビを見ながら時間を潰していた。

時刻はそろそろ日付が変わろうとしているのに俺は眠れそうになり、もう一人は――

「……んっ……んにゅ」

ツルツルのすべすべ。

悠のおでこは本当に気持ちいい。でも、唇はもつと気持ちいいと思う。

……はっ。

俺は何をやっているのだ。俺は何を考えているのだ。

「んん……にゃ……お」

子犬のイラストがプリントされたパジャマを着た子猫がいる。

「にゃ……なお、ん……そこは……ら、らめえ」

何の夢を見ているのか知らんが、俺の名前を艶かしく呼ぶな！

「はあ……ったく、こいつは」

胸の中、すやすやと幸せそうな悠のおでこを軽く撫でると、ギュッとシャツを掴んで身体をすり寄せてくる。その姿は本当に子猫のようで、抱きしめたい衝動に駆られるが今は幸せそうに眠っている悠を起こすのは忍びない。

それに、こんなかわいい寝顔を見られるのは役得というものだろうし。

俺がおでこに口付けをしてパニックだった悠は麦茶を一気に煽り、一〇分ほどすったもんだあったあとに落ち着きを取り戻した。しか

し、それから少し経ってから眠そうにあくびを噛み殺していた。

俺が何度も寝た方がいいと言ったのだが何故か首を横に振るばかりで言う事を聞かず、結局座ったままウトウトし始めて危ないと思っ
って横にしようとしたら、俺のシャツを掴んでそのまま眠ってしまったのだ。

それにしても、本当にかわいい寝顔だ。

「たべちゃう、ぞ……こら」

ボソツと呟いた声に身動きしてすり寄ってくる悠に苦笑しつつ、柔らかな頬を突付いて悠の身体を一度畳の上にゆっくりと寝かせて、まずは思いつき背伸びをする。

さすがに三〇分近く抱きかかえていたので身体が凝り固まり、筋肉が悲鳴を上げながら伸びていくのが気持ちいい。

……さて、と。

無駄な事を考えていないでさっさと運んでしまおう。

畳の上では悠が静かに寝息をたてて起きる気配もなく、このまま布団まで運んでしまおうと思った。なので一度体勢を変える必要があったのだが、何だか運んでしまうのが急に惜しくなってきた。

「何を考えているんだ、俺は」

ふと過ぎった考えを振り払い、深呼吸をして膝の裏と脇の下に手を差し入れ、気合一発——起こさないように注意しながら悠を持ち上げた。

「——軽っ」

が、拍子抜けするほど悠は軽かった。そのため、勢い余ってうしろへ転びそうになってしまい、妙なステップを踏む結果となったが何とか倒れることは免れた。これで倒れてしまっ
ては誰も見ていない

とは言え、俺の威厳にも関わるからな。

「ふう……あぶな——」

と、そこでふと視線を感じて辺りを見渡したが誰の姿もなく、もう一度キョロキョロと辺りを伺って見たが結果は同じ。もしかしたらあき姉が目覚ましてこの状況をどこかに隠れて見ているのかと思ったが、今日の様子ではそれは少ないと思う。ならば、この妙な視線は一体……と、思いながら何気なく下を向いた俺は、そこでバツチリと目が合った。

「あ、悪い。起こしてしまったか？」

「あう……あ、あああ、あ」

果たして、視線の正体は悠だった。

まあ、余計なステップなど踏んでしまったからその衝撃で目が覚めたのか知れないが、どうやら完全には状況を理解していないのか、言葉を失っているようだ。

「もう遅いから、布団で寝ような」

コクコク。

「トイレは行かなくていいか？」

コクコク。

「今日は一緒に寝るか？」

コク——プシューツ

驚いているが俺の言っている事は理解しているようで、全身を薄っすらと桜色に染めて恥ずかしそうに俺の服を掴んでいた。だが、さすがにそのままでは万が一のときは危ないし、腕だけで支えるよりも首を含めた三点で抱える方が楽になる。

「悠、腕を俺の首に回してくれないか」

ビクツと身体を震わせて躊躇うような視線を向けたが、やがてオズオズと手を伸ばして俺の首に腕を回してしっかりと抱きついてきた。

「んじゃ、布団まで行くか」

「う……うん」

潤んだ瞳を向けてやつとの事で搾り出した声で頷き、俺は悠を抱えて俺達の部屋へと向かった。

布団の上にゆっくりと悠を下ろした俺は、そのまま自分の布団へと腰を下ろした。

さすがに悠が軽いといっても昼間に働いて疲れている身体では、距離が短くても堪えるものだ。持ち上げたときはそうでもなかったが、悠が目を覚ましたので少しばかり時間がかかり、その間に腕への負担が大きくなってしまったのが原因だろう。

「な、なお君大丈夫？」

「大丈夫だって」

弾かれるように起き上がった悠は俺の方へと近寄り、心配そうに俺の身体をペタペタと触っていく。

どうやら完全に目が覚めてしまった様子の悠は心配そうに俺の事を見つめ、何を思ったのか俺の腕を掴んでマッサージを始めてしまった。

一生懸命。本当に一生懸命な悠の小さな手が、俺の腕を包んで優しく揉んでいく。

「大丈夫だから、もういいって」

「だめ。こんなに張ってのに……なお君、マッサージとかしてないでしょ？ だから、いつまで経っても腕が痛いんだよ」

「いたっ」

「あっ、ご、ごめんっ」

少しきつめの口調で口を尖らせた悠の手に力が入り、爪の跡はみずの這った跡のように残っていた。どうやら驚いた悠が手を引いたとき出来たのだろうが、ただ単に俺の皮膚が弱いので跡が残るやすいだけで、それほど痛かったわけではない。それに、さっきのも条件反射で口から出たようなもので、俺も我慢すればよかったがとにかく騒ぎ立てる事でもない。

「大丈夫だから気にするな。でも、確かに適当なマッサージじゃ腕の痛みが引くわけないか」

「……」

俺の事を心配してくれている悠の忠告だから真剣に受け止め、悠のマッサージを受け入れようと思ったのだが何故か悠の手が止まり、突然俯いて肩を震わせ始めた。

「ゆ、悠っ？」

「……んっ……んぐ……」

ボロボロと大粒の涙をこぼし、揺れる髪の毛の奥から雫がほろほろと腕の上へと落ちてくる。

温かい。でも、悲しい涙。

「大丈夫だから気にするなって」

「……だ、だって、ボク……また、なお君を」

肩を震わせて子供のような嗚咽を漏らし、「だって」とばかり繰り返す悠。

その姿を、俺はどこかで見た事がある。

あれは——いつだったか？ あれは、あれ……。

そうだ。

あれは“あの日”の出来事から数日が経ち、また雨が降った日の出来事だった。

その日は朝から雨が降り続けていたが、雷や風は昼過ぎには小雨になっていた。放課後になっても外で遊ぶ事が出来ない俺達は教室に残って遊んでいたが、教室の中は机や椅子があって広くはないし、ボール遊びなどはガラスがあるから出来ない。結局、鬼ごっこをする事になったのだが、教室だけでは狭いと言う事で校舎を全部使ってやる事になったが、悠は少し躊躇ってから教室に残っているといい、俺は一瞬迷ったが大丈夫だという悠の言葉を信じて俺は鬼ごっこに参加した。

鬼ごっこを始めて一時間ほど。

そろそろ、帰らないといけなし、悠の事が気になったので教室に戻ってみると悠の姿がなかった。

悠のランドセルは机の上にあるから最初はトイレにでも行っているのだと思った。その内、友達はみんな帰っていき、教室には俺と悠のランドセルが残され、ふとこの前の“出来事”が俺の頭に過ぎった。

もしかして、悠は俺を探しに行ったのではないか？

一人になって寂しくて俺を探しているのではないかと思ったら、俺は慌てて教室を飛び出して悠を探し始めた。

しかし、探しても探しても悠の姿は見つからず、気付けば普段は明るい時間帯なのに、外は雨雲が光を遮って夜のように薄暗くなっていた。

このままでは、また悠が泣いてしまう。

そう思っただけなのに、どこを探しても見つからない。俺の方が泣きたい気分になりながらも、必死に悠の事を探し回っていた俺の耳に、どこからか泣き声が聞こえてきた。

その泣き声に向かって俺は必死に走り、そこでようやく探し人を見つけた。

ボロボロと大粒の涙を流しながら俺の名前を呼ぶ悠の姿を見たときに、さすがに文句の一つでも言ってやろうと悠のそばに駆け寄ったが、俺に気付いた悠が更に大きな声で泣き始めてしまった。さすがにその行動に俺は驚いて怒るところではなくなった俺は、とりあえず悠を落ち着かせるのに必死だった。

『酷いよ、ボクを一人にして、なお君どこにいったのっ』

一瞬何を言っているのか分からなかったが、泣きながら俺の腕を掴んで離さない悠の話では、俺が悠を置いて帰ったと思ったらしい。詳しく聞いてみると、どうやら塾があると先に帰った友達が教室に帰ってきたのに、俺が姿を現さないから思い出したようで、そのあ

と教室を飛び出して俺を探していたらしい。

そして、残っていた俺達もそれをキツカケに鬼ごっこを止めて教室に戻ったのだが、本当に入れ違いだったようで、それを説明してようやく納得してくれた。

まあ、話はそこで終わりなのだが、泣き止んだ悠が離してくれた俺の腕は爪で引っかかれた跡が無数にあり、それを見た悠は真っ青な顔で俺の腕を手にとって何度も謝りながらまた泣き始めてしまった。

多分、俺の腕を見て驚いたのと、自分が傷つけてしまった事が怖かったのだと思う。だから、俺は何度も大丈夫だと言ったが、悠は聞いてくれなかった。

『だって、ボクが……なお君に怪我させちゃったからっ』

それからはもう話にはならず、「だって」と繰り返す悠を宥めるのが精一杯で、そこを先生に見つかって俺はこつてりと怒られ、更に悠が大泣きする事になったのは予想外の出来事だった。

と、懐かしい思い出に浸っている場合ではない。

「大丈夫だって——といっても、悠は納得ないんだろ」

「だって、だって……ボク、またなお君に」

これくらいは怪我の内に入らないのだが、俺の腕を撫でながらほろほろと涙をこぼす悠には俺の声が届いてないようだった。

同じ事を繰り返し、過去に囚われた悠を助けるために。

いや、違う。

もしかして、過去に囚われているのは俺も同じなのか？ あの日の出来事を気にして悠に告白すら出来ない俺は悠のトラウマのせいにして、ただ先送りしているだけなのかも知れない。

その証拠に、こんなにも克明に昔の事を覚えているじゃないか。普通なら忘れているような些細な事も、悠との思い出は克明に覚え

ている。

「俺は、悠に助けてもらって……いや、いつも心配かけてごめんな」
「そんな、こと……」

「だけど、今は言葉ではない。
ちよつとズルいかも知れないが、こうしないと話すら出来ないから。」

「——っ」

ここに来てから昔の事ばかり思い出して、悠の事ばかり気になつて。

そして、悠が好きだって気付いて。

「な……なお、くん？」

「怒ったらするって、言ったらろ」

おでこを押さえて呆然としている悠は俺を見つめたまま、言葉の意味を理解して小さく頷いて俯こうとしたが、その前に悠の身体を引き寄せて抱きしめていた。

「俺が怒っている理由、分かるか？」

「それは……ボクが手を怪我……」

「ブー、不正解」

少し言い方がきついかも知れないし、あまり好きなやり方ではないが、こうでもないし悠は聞いてくれないだろう。

俯いて震える悠の身体を抱きしめ、震える背中をゆっくりと撫でていく。

「俺が怒っているのは、悠が俺の話を聞いてくれないからだ」

「だ、だって……」

「はい、『だって』は禁止」

さすがに今日はこれ以上話すのは無理かも知れない。

「そろそろ、寝ようか」

その声に小さく頷いてシャツを握る悠は、ぐしゅつと鼻を鳴らして顔をすり寄せてくる。

「ゆ、悠？」

「やだ……なお、く……いっちゃ、や」

一瞬何を言っているのかピンツとこなかったが、その意味を理解して少しだけ動揺してしまった。でも、それを拒む理由はない。

俺もそうしたいと思っていたから。

「分かった。今日はこのまま……」

「――っ……な、なお」

少しだけ腕を緩めて先にゆっくりと悠を布団へ寝かせて、不安そうな色に揺れる瞳で俺を見つめる悠の髪を撫で、軽く頬へと口付けをしてそのまま隣へ横になる。

一瞬の静寂。

オズオズと伸ばされた手を握り、まだ不安そうな悠を抱き寄せて悠のおでこに自分のおでこをコツンと当てた。

「おやすみ、悠」

「んっ……おやすみ、なお君」

間近で見る悠の瞳は本当に綺麗で、自然と漏れた笑みに悠は恥ずかしそうに頬を染めて微笑む。

その微笑みに見つめられて眠れるかと聞かれたら正直微妙だが、でも心はいつもより落ち着いている。寧ろ、目の前にいる悠が愛しくて堪らず、ただ見つめていたいと思っている。

……悠、好きだ。

その思いを胸に、今日は悠の夢が見られたらいいなと思いながら、俺は静かに目を閉じた。

第六話：理屈じゃない。

海鳥が鳴く。これでもかと鳴く。

朝からうるさい事この上ないが、春のポカポカとしたひだまりみたいな温もりが心地よく、起きたくはないがそろそろ時間かなと目を開けた。が、ふと違和感を覚えた。

妙に壁が近い。

いつもならもう少し遠いはずの壁が今日は近いなと思いながら身体を起こすと、ふあさつと音をたてて何かが落ちた。

「これは……」

俺の足元に丸まっているタオルケットを手にとると、春のひだまりみたいな優しい匂いがした。

「……そうか。あのまま寝たんだっけ」

俺が寝ていたのは悠の布団。だから、妙に心地いい温もりと匂いがすると思った。

壁にかけられた時計を見ると、時刻は午前八時半。昨夜は寝たのが遅い割に意外と目覚めがスッキリしているし、身体も異様に軽い。理由は深く考えなくても分かる。

「さて、と——さっさと着替えるか」

気合一発。背伸びをして立ち上がった俺はパジャマ代わりのTシャツとハーフパンツを脱ぎ、ちゃっちゃと着替えを済ませて洗面所へと向かった。

……。

……。

が、そこで珍妙な光景に出会ってしまった。

「何、してんだ？」

「——っ、ごめんなさいっ」

何故か謝れてしまった。

「いや、意味が分からんから」

「あ、あれ……な、なお君？」

微妙に涙目。微妙に上目遣い。

身長差を考えれば仕方ない事だが、昨晚の事があるので正直顔を合わせるのが恥ずかしいと思っていたが、これは予想以上に恥ずかしいな。

が、動揺してはいけない。

悠が意識していない以上、俺が必要に意識しては馬鹿みたいだ。

「それで、どうし——悠、何を隠してんだ？」

「え、あ……え、えっと、ね」

耳まで赤くしてモゴモゴと呟いている悠は後ろ手に何かを隠しているのは明白で、チラッと俺を見て恥ずかしそうにはにかんで洗濯機を指さしていた。

それでも意味が分からない俺は指さされた洗濯機の前に行き、中を覗いてやっと納得した。

「こりゃ、すごいな」

「……ご、ごめんなさい」

てててっと俺の横に近寄ってきた悠は後ろ手に隠していたものを俺の前に恐る恐る差し出し、叱られた子犬みたいにシュンとしていた。

差し出されたものを受けってみると、それは空っぽになった洗剤の箱。そして、その中身は洗濯機の中で溶けきることなく表面を漂い、洗濯物がまったく見えなくなっていた。

「手でも滑ったのか？」

「あ、えっと……その」

しゅーっと音がしそうな勢いで真っ赤になっていく悠は俺から顔を逸らし——

「な、なお……くん、のこと……かんがえていたら、どばーって」指を突き合わせてあうあうしながら俯いてしまった。

「あー……う、うん。それは仕方ないよな」

何と答えていいのやら。

多分、昨晚の事を思い出してボーっとしていたのだろう。普段なら失敗などしない悠が失敗するとは……今更ながら、結構恥ずかしい事をしたのだと実感してしまった。

「と、とりあえず——これをどうにかしないと、あき姉に見つかったら厄介だし」

「そ、そうだね」

何ともぎこちない会話を交わしつつ、洗濯機の中に浮かぶ洗剤の粉をある程度取り除く事が出来たところで悠は洗濯を開始。

その姿を見ながら若奥様だなと妙な妄想をしてしまい、慌ててそれを振り払っていいこうとしたが、きゅっと俺の手を掴まれて心臓が口から飛び出しそうになった。

「ど、どうした？」

当然の事なので、上ずった声はご愛嬌。

「あ、あの……な、にゃお君」

同じく、微妙に囁んで上ずった声の悠もご愛嬌だろうな。

「にゃお君って誰だよ」

「そ、そんな事は——もう、なお君の意地悪っ」

ぽこぽこかわいい音をさせて叩く悠は本気で恥ずかしかったのか、目に涙を浮かべて口は“へ”の字に曲げて眉を吊り上げて睨んでいた。が、本来なら怖いはずなのにまったく怖くないのは、惚れた弱み……なのかも知れない。

「ごめんって。そんなに怒るなよ、な」

「ふん、だ。意地悪するなお君なんて、きら……い、なんだもん」
だからなのか、こんな事を言われてもショックはなく、寧ろ今まで見た事もない悠が見られて嬉しい気持ちになっていた。

「で、でも、やっぱり嫌いになんて……なれない、よ」

ギュッと俺のシャツを掴み、“ごめんね”と上目遣いで訴えてくる悠にドキッとしながら、愛しい気持ちが溢れて自然と悠を抱きしめていた。

「あ……なお、く」

驚きと戸惑い。

腕の中で身動き一つしない悠の瞳は儚げに揺れていたが、すぐに幸せそうな笑みを浮かべて俺の胸に顔をすり寄せて腕を回してきた。

「なお君……なお、くん」

何度も、何度も、俺の名前を呼ぶ悠の吐息が胸をくすぐり、それが悠への愛しさに拍車をかけて気持ちに暴走していく。

このまま、押し倒して悠の全てを奪いたい。

だが、それをすれば本当に悠から嫌われてしまうのは分かりきっている。ものには順序というものがあり、まずは告白だ。そして、デートして、キスして、最後は……。

「こほんっ——こんなところで何をイチャイチャしているのかしら、二人とも」

が、現実には厳しいもので。

「うわっ」

「きゃっ」

俺達は抱き合ったままの格好で声の方を振り返ると、そこにはデジカメを片手にあき姉がたばこをふかしながらにへらと笑いながらシャッターを切っていた。

朝からそれはもう大変な目にあったが、本日もアクアマリンは大盛況。

昨日の騒動もなんのその、今日もお客さんが溢れ返る店内をあき姉と悠が駆け回り、俺は鉄板と向かい合ってフル稼働中。

「ナオ、お好み焼き三枚。焼きそば二つは急いでお願い」

「なお君、青海苔抜きで焼きそば一つ出来るかな」

パタパタとトレイを胸の前で抱えてやってきた悠がニッコリと微笑んでいたが、すぐに眉を下げて心配そうな顔をして覗き込む。

「なお君、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。それより、あき姉が睨んでいるぞ」

「あ、うん。それじゃ、無理しちゃ駄目だからね」

苦笑する俺に促されて向けた視線の先には、キュピーンと光る猛禽類の目をしたあき姉がデジカメをちらつかせてこちらを見ていた。

……。

……。

それから、あき姉の意味深な笑みに負けそうになりながら、悠の笑顔に励まされながら、何とかお昼の時間を終え、おばさんが近所のお仲間——毎年お手伝いをしてくれるご近所さん——を引き連れてやってきたので、俺と悠は昼の休憩をする事になった。

「ち、ちかれたー」

「はい、麦茶だよ」

目の前に置かれたコップを一気に煽って飲み干し、疲れた身体に心地よい安らぎが広がっていく。

「今日もすごかったねえ」

「そうだな。だが、明日で終わりだと思うと……」

嬉しいような、寂しいような、不思議な気持ちが沸き起こってくる。

毎年のようにここでバイトをしているのに、こんな気持ちになったのは始めてだ。いつもなら、また来年もあるからとか、早く終わらないかなとか、そんな事ばかり考えていたのに。

今年は違う。

何故か、この時間が終わって欲しくないと思っている。その理由は分かっている。

「どうしたの？　なお君、どこか具合悪いの」

それは、コイツだ。

「いや、何でもない」

「本当に？ 無理しちゃ駄目だからね」

心配そうに俺の腕に手を添えて懇願する姿は、さながら“泣きそうなわんこ”そのものだった。

「大丈夫だ。無理はするつもりはないから」

「んにゃ……も、もうっ」

わしゃわしゃと髪を撫でると、猫のような甘えた声を出して目を細め、くすぐったそうに身動きをしていく。この姿をみると“甘えん坊のこねこ”なのだが、はてさて……悠はどっちなんだろうと妙な事を考えていたら、下からエグエグと泣きそうな悠が俺を見上げていた。

「あ、悪い」

「あう……くしゃくしゃだおー」

髪を梳かしながらぷうっと頬を膨らませた悠の視線を軽やかに交わし、俺はおにぎりを一つ掴んで食べ始めた。

「……んっ、んまい」

ほどよい握り加減と塩味の絶妙なハーモニーをかもし出し、中に入った塩鮭の解し身も塩加減はばっちりで邪魔をしていない。

「さすがだな。何を作らせても悠はうまいもんだ」

「そ、そんなこと……」

恥ずかしそうに頬に手を添えてクネクネと悶える悠を見ているのは面白いが、本当に悠の料理はおいしいと思う。中学ののときにあった家庭科の調理実習では女子よりも包丁の扱いがうまくてみんなが感心していたくらいだからな。まあ、悠の家——俺の家もだが——は共働きだから必要に迫られて仕方なくなのかも知れないが、その頃より明らかに上達しているのは確かだった。

「ところで、悠の得意料理ってなんだ？」

「え、えっと……これと言って得意なのは……でも、強いて言えば、肉じゃが、かな」

これまた、何とも。

「そっか。……んっ？」

でも、色々と悠の料理は食べたが、肉じゃ

が食べた事がない、ぞ？」

ふと、悠が作ってくれた色々な料理が脳裏に浮かんでは消えていったが、その中に肉じゃがはなかった。と、思う。

「あ、う……それは、あの」

だが、それは俺の勘違いではなさそうだ。

何とも複雑な表情で視線を逸らす悠に困惑してしまったが、ふと目が合うと困ったように笑っていた。

「そ、その……得意料理なんだけど、あの……中々、満足する味にならないっていうか」

「そうなのか？」

「う、うん。お母さんおいしいって言うってくれるんだけど、ボクとしては満足出来ないっていうか、ね」

つまり、何度も作っている内に得意料理となり、身内は褒められるほどの腕前となったが、当人は納得していないという事か。

まあ、悠の中にはある種のポリシーがあって、自分で満足しない料理は俺に食べさせてくれないのだ。俺の家も共働きなので自炊をしていたが、悠の料理を食べたら自分で作るのが虚しくなったものだ。俺にはあの味は真似でない。ある意味ではあまり料理をしない我が母親に変わり、悠の料理が俺の中で『おふくろの味』となっているのは秘密である。

その『おふくろの味』で第一候補に挙がる肉じゃがを今まで食べていなかった事に気付かなかったなんて、俺の馬鹿！

「ああ——俺も食べてみたいな、肉じゃが」

「そ、そのうち……ね」

何とも歯切れの悪い悠は苦笑しながら俺から目を逸らし、吹けもしない口笛でごまかそうとしている姿が面白くて噴き出した俺を、真っ赤な顔でぽこぽこ叩く悠から逃れながら休憩は過ぎていった。

休憩後、客足はそれほど増える事もなく、無事に終えて俺は後片

付けをしていた。悠は夕食の準備を張り切っており、お腹の虫が騒ぎ出すいい匂いがこちらまで漂ってきていた。

「がんばっているかねえ、せいしょーねん」

と、そんなところに、あき姉が缶ビール片手にやってきた。

この人は本当にお酒が好きなんだなと思いつつ、半分ほど出来上がっているあき姉が絡んできた。

微妙に『せいしょーねん』という発音が気にはなったが、それはあえてスルーする事にしよう。気にしたら負けな気がするし。

「酔っ払いは早々に寝てください」

「うわ、ひどっ——これは頑張った一日のご褒美なんだから」

クイツと缶ビールを煽るあき姉は上機嫌。この缶を空ける頃にはリビングデッドの出来あがりだろうな。

「それより、ユウとはうまくいっているのかしら」

「う、うまくってなんだよっ？」

「あら、エロエロなおちゃんってば……とぼけちゃって、ムツツリなんだから」

むふふっと笑みを浮かべ、その言葉の裏に色々な意味があるの是一目瞭然。余計な事を言われない内に話を切り上げるべきだろう。

「で、エッチはしたの？」

が、予想外のだ直球爆弾投下。

明らかに俺の反応を楽しんでいるあき姉は胸の谷間からデジカメを取り出し、更にあくどい顔をして俺に近寄ってきた。

「朝から抱き合ってイチヤイチヤしていたくらいだから、昨日の晩はさぞや盛り上がったかなと思ったけど」

「だ、だから、それは——」

「まあ、二人がイチヤイチヤするのは勝手だけどさ……ナオ、ちゃんと『理屈』抜きでユウに告白したんでしょうね？」

どこか答えが分かっているクイズを仕掛けるような、意地悪な笑

みを浮かべたあき姉だが、その瞳は俺達の事を本気で心配しているのは分かる。

「……まだ、みたいね」

しかし、違うところへ思考を巡らせていた俺の耳に、あき姉のため息が聞こえてきた。

「い、いや……それは」

「まったく、言葉にしないまままで伝わるわけないでしょ。相手が超能力者なら分からないけどさ」

これ見よがしに呆れられてしまった。

「それとも、ユウの『雷嫌い』を気にして言えないのかしら？」

だが、次の言葉はこれまでの雰囲気を払拭する真剣な声だった。

缶ビール片手の酔っ払いだったあき姉が、今は真剣な目をして俺を真っ直ぐに見つめて立っている。言葉にするのは難しいが、このあき姉には逆らえない迫力があるのだ。

「それは、その……」

「ハッキリしなさい。ウダウダ言うのは男らしくないわよっ」

ごまかそうとすれば問答無用で拳が飛んでくるし、お小言は一時間以上続くし。このときのあき姉は本気になっているときだから、俺も無駄な事は避けて素直になるしかない。

「確かにその通りです」

「そう。でも、どうして告白するのを躊躇っているの？ 好きなら気持ち伝えなさい」

「そ、それはそうかも知れないけど」

「はあ……ウダウダしてから。ナオは余計な事を考えて本当に大切なものを見落としているわよ」

本気で呆れたと言わんばかりの顔でため息を吐かれました。

「……本当に大切なもの？」

「そうよ。雷嫌いを『言い訳』にして、本当に大切なものを後回し

にしているから」

「そ、そんな事は――」

ないと言いたかった。でも、何故か言い切れなかった。

確かにあき姉が言うように『言い訳』にしているのかも知れない。でも、それは大切な事だと俺は思っている。あき姉はあの場になかったから分らないだけで、俺はあのときの悠を見ているのだ。

「大体、雷嫌いがユウのトラウマだと思っているかも知れないけど、それはナオ――あんたにも当てはまるのよ」

それはまったく予想していなかった言葉だった。

「そうよ。確かに私はあの場にはいなかったから詳しい事は分からないよ。でもね、明らかにナオはその事に拘り過ぎているのは私にも分かる。ユウよりも、ナオの方が雷を怖がっているように私は思うわ」

「俺が……？」

「それと――多分気付いていないでしょうから言うけど、ユウは雷自体を怖がっていないわよ。そうね、もっと別の何かを怖がっているように見えるわね」

意味が分からなかった。あき姉が言っているのはあくまでも予想だ。それを分かっているのは俺自身のはずなのに、どうして俺は何も言えないのだ？

「別の何かって、どういう意味……」

「それは自分で考えなさい。今のナオは一つに固執して見落としているものが、どこにかあるのかも知れないから」

「いきなり、アバウトになったけど」

「そりゃ、私は超能力者じゃないから全部が分かるはずないでしょ。でも、二人を昔から見てきた私だから二人を見ていると気付く事もあるのよ」

何ともズルいお姉さんだな、この人は。

「ナオは目先にある事ばかりに拘り過ぎね。少し視点を変えたら、答えなんて案外簡単に見つかるかも知れないわよ」

それだけを言うと、ひらひらと手を振って行ってしまうあき姉のうしろ姿を見送りながら、俺は今言われた事が頭の中でグルグルと回っていた。

夕食後、俺は居間でぼんやりとテレビを見ていたが、面白くないので散歩に出かける事にした。

理由は簡単。

夕食前にあき姉から言われた事が気になって仕方ないからだった。

「言い訳、か」

そう言われて言葉が出なかったのは、心のどこかでソレを認めていたのかも知れない。

俺は言い訳にはしていないつもりだった。でも、本当にそうなのかと思い返したら、俺は自分の気持ちを分かっているながら、自分の行動を『言い訳』で押し付けていた。

「くそっ……」

どうすればいいんだ。

確かに俺は悠の雷嫌いを言い訳にしていたのかも知れない。でも、悠が雷嫌いではないと言われたら、俺はどうしたらいいんだよ。

ずっとそうだと思っていた。いや、そう思い込んでいた？　だが、今更何を怖がっているのなんて分かるはずがない。俺はずっと悠と一緒にいたんだ。それこそ、あき姉よりも一緒にいたのに、何であき姉に気付いて俺には気付けないんだ。一瞬嘘を吐いているのかと思った。

でも、あき姉が嘘を吐くはずがない。

それも、あのときのあき姉が冗談をいう必要がないし、でまかせを言って俺を混乱させるはずがない。多分、確証はないが悠を見ていて気付いた事があるのだと思う。

「分らない……」

色々と考えていたら余計に混乱してきた。まずは一つに絞って考

えた方がいいのかも知れないと思うが、考えていたら無性に悠を“求めている”自分に気付いた。

「なお君っ」

だから、幻聴が聞こえたのかと思った。

でも、それは幻聴ではなく、俺の耳に、俺の目に、しっかりと存在を教えてくれた。

「どうした？」

「もう、酷いよ。一人で散歩に行っちゃうなんて」

むすっと頬を膨らませて俺の横に立つ悠は俺のシャツを掴み、不満そうにシャツを引っ張る。

「ごめん。ちよっと考え事がしたかったから」

「え、あ……ご、ごめん」

しかし、俺の言葉にパツと手を離して後退しようとした悠を、俺は力の限り抱き寄せていた。

「な、なお……」

言葉が出てこない。

ただ、そばにいてくれる事がこれほど嬉しいと思った事はない。

「少しだけ、こうしていいかい」

「……うん、いいよ」

優しい、本当に優しい声が俺の身体を包み、心地よい温もりも一緒に身体を包み込んでくる。

「悠はいい匂いがするな」

「そ、そうかな……あ、でも、汗が、その」

「それでもいい匂いだ。汗も、シャンプーも、何かも全てが『悠』なんだよ」

不思議だった。

いつもなら恥ずかしくて言葉に出来ないような事まで、今は何でも言葉に出来そうな気がして、ついつい余計な事まで言ってしまう

そうな、心が本当に軽い感じがしていた。

「ボクも、なお君の匂い……好き、だよ」

「俺の方こそ、汗臭いだろ。まだ風呂入ってないし」

「そんな事ないよ。なお君がそばにいるって感じる事が出来る……一人じゃないって、思える証だから」

甘えるように、慈しむように、俺の胸に顔を埋める悠の温もりが心地よかった。

不安とか、寂しさとか、心の中にある様々な思いに潰されそうな俺を癒してくれるのは間違いない、『悠』の存在だ。その悠が俺の前からいなくなったたら、俺はきつと駄目になる。

「そうか……そういう事か」

「どうしたの、なお君」

不意に声を上げた俺を不思議そうに見上げる悠の瞳は熱帯び、吐息が首をくすぐっていく。

「いや、俺は馬鹿な勘違いをしていたなって思ってたな」

意味が分からないとばかりに首を傾げる悠の頬を突付き、ぷうっと頬を膨らませた悠を愛しい気持ちを含めて抱きしめた。

……一人は嫌だ。

そうだ。一人は嫌なんだ。

「一人は、嫌だな……」

「な、なお……くん？」

一人は嫌だったんだ。雷が怖くて泣いていたと思っていた悠は、本当は一人になるのが怖くて泣いていたのではないか？

「なお君、どうしたの？」

「あ、いや、雷が——っ」

不意に声をかけられて思わず口を付いて出た言葉を飲み込んだが時すでに遅し。目を丸くして俺を見つめていた悠が身体を震わせて俺にすがり付くように抱きついてきた。

「ごめんね」

だが、俺の口からではなく、何故か悠の口から謝罪の言葉が紡がれ、俺は混乱していた。

「なお君、まだ気にしていたんだね……ごめんね、ボクのせいで」

「違う。それは俺が悪いんだから——俺のせいで、お前は雷が苦手になって」

「……ううん、違うよ。なお君は勘違いしているよ」

「勘違い？」

「……ボクは雷が嫌いなんじゃない」

それは衝撃的な告白だった。そして、あき姉の言葉が本当だった事に、俺は自分が何を見ていたのか自信をなくしていた。

確かに悠は雷が鳴り始めると怯えてしまうから、俺は雷が嫌いなのだと思っていた。でも、それが根本から間違っていたのなら、俺は何て馬鹿な間違いをしていたのだろう。

「ごめんね。今まで何度も言おうとしたけど……っ……言えなかった」

苦しそうに俺を見つめる悠が何を言っているのか最初は理解できなかった。

「言ってしまったら、なお君が離れていってしまいそうで……だから、だから……っ」

ボロボロと溢れ出した涙が俺の胸に沁みこみ、ギュッと回された手から思いが溢れているような気がした。

「雷が鳴る度に思い出しちゃって……また、誰もいなくなっちゃうんじゃないかって、なお君がそばからいなくなっちゃうんじゃないって。そればかりを思い出して、考えて、怖くて……なお君がそばにいないのが寂しくてっ」

支離滅裂。

だが、優しくも儚い笑みを浮かべて悠は笑おうとする。自分が悪いから気にしないでと言わんばかりに。

あの日の事を思い出し、胸の中が痛くて痛くて堪らないのだろう。

背中に回された手に力がこもり、シャツが引っ張られていく。

怖くて、寂しくて――孤独な時間を過ごした恐怖が蘇っているのは瞳を見れば分かる。

あの頃の泣いて俺にしがみついてきた悠と同じ色をして、俺を見つめる瞳が俺を包む。

「もういい。もういいから――本当にごめんな、悠」

だから、見ていられなかった。

こんなにも弱弱しく、今にも壊れてしまいそうな悠を見ているのがつらくて、ここまで悠を追い込んだのは俺の思い込みが原因だ。

「ううん、謝らないで。なお君はボクを見つけてくれたでしょ」

責められても仕方がない事だ。でも、悠は一度も俺を責める事はなかった。

それどころか、俺を必要としてくれる悠に俺は甘えていたのかも知れない。何もかも悠のせいにして、俺は自分で考える事を拒否していた。

「ボクを一人にしないでくれた……優しいなお君が、ボクは――」
最低だな、俺は。

もう、分かっている。俺が言わなくていけない事は。

それまで悠に言わせていいわけがない。いや、これはちっぽけな男としてのプライドなのだろう。

「悠っ」

「――っ」

だから、俺から伝えよう。本当に大切なものを見落としていた俺が今更なのかも知れないが、これだけは俺から伝えるべき言葉だと思ふから。

「俺は悠の事が好きだっ」

やっと言葉に出来た。

色々と考えて、何が正解なのかは分からない。でも、今この瞬間

を逃しては俺が気持ちを伝える事が出来ないと思ったから。

「え、あ……えっ？」

驚きで言葉が出ないのか、パチクリと瞬きをして俺の顔を見つめる悠が小鳥みたいでかわいいと思いつつ、まだ思いを伝えるべく言葉が続ける。

「お前が好きなんだ、悠」

「な、なお……くん」

俺の名前を呼びながらシャツを握る悠は戸惑ったような、困惑したような、複雑な表情を浮かべては消し、言葉を探しているかのように視線を彷徨わせる。

「で、でも……ボクは男——」

「だからどうした。俺が好きになったのは『悠』だ——男だとかそんなものは関係ない」

「——っ」

言葉にしてしまえばこれほど簡単な事はない。悠の言葉も本心からではないのは、今の悠を見ていれば分かる。

「いきなりで驚かせてしまったみたいだな」

ゆっくりと夕の身体を包むように、愛しく思う気持ちを込めて抱きしめ、髪を撫で、背中を優しく撫でていく。

「な……お、くん」

どこか現実離れしていたのは俺も同じで、悠の瞳に俺が映っているのを見つけ、ふと笑みがこぼれた。

が、次の瞬間悠の瞳からは大粒の雫がこぼれ落ち、頬を濡らしていく。

「ほん、と……に……ほんとうに、ボクのこと」

「ああ、好きだ。泣き虫で頑張り屋で、誰よりも優しい悠が大好きなんだ」

溢れ出る雫は次から次へとこぼれ落ち、そっと指で掬った雫は温かい気持ちで満ち溢れ、俺の身体に広がっていく。

「ボクも……ボクもなお君が好き——大好きなのっ」

それは幸せの言葉。

胸の中に広がる幸せが悠にも伝わるように、俺が好きな気持ちを
もつと伝えるために。

これ以上は言葉では無理だ。これ以上は俺の思いを言葉にする事
が出来ない。

「悠……」

だから、もつと直接思いをぶつける。

真っ直ぐに、少し恥ずかしそうに俺を見上げる悠はゆっくりと瞳
を閉じ、溢れ出した雫が頬を伝い落ちていく。

「——んっ」

悠の身体を引き寄せ、この瞬間を一生忘れないようにと心に誓い、
ありったけの思いを込めて唇を重ねた。

「なお……くん」

触れるだけの口付け。

ただそれだけの事だったが俺の心臓は痛いくらいに激しく打ち付
け、悠はビクツと震えた身体から徐々に力が抜けて俺にしなだれか
かるように、手に力をこめて抱き付いてきた。

止められない。もう、抑える事が出来ない衝動が俺の身体を突き
動かす。

「悠……」

「なお、君……んっ」

何を言わんとするかは分かっている。その瞳が欲するものは分か
っている。

だから、もう一度唇を重ねる。

震える唇から悠の思いが伝わってくるように、俺の思いも悠へと
届ける。互いに求めるように唇を啄ばみ、互いの身体を抱き寄せて
いく。

まだ始めの一步を踏み出したばかりなのは分かる。でも、今はこ

の瞬間を大事にしたい。今という時間は今だけにしか存在しないもの。

過去を振り返ったときに後悔をしないために、俺はこの瞬間を大切にしたい。

「ゆう……んっ」

手の中にある温もりが俺に伝えてくれるこの瞬間が愛しく、離さないために、消さないために。

「なお——んっ……らい、しゅ……んんっ」

悠が俺の手を、俺が悠の手を——しっかりと繋ぎ、愛しさを込めて俺達は深く唇を重ねていった。

第七話…これからは、二人で手を繋ぎ……。

朝の爽やかな海風が窓から吹き込み、揺れるカーテンから振り込む光は、今日の天気を教えてくれていた。

いい天気だな。

バイトの最終日が雨なんて嫌だなと思っていたが、心配はいらなかったみたいだ。まあ、最近の天気予報が結構予報が当たるので問題は無いと思うが、ゲリラ豪雨とかあるし、異常気象は予報できないだろうしな。

と、天気談義はこの辺にして、さっさと着替えていくとするか。

「なおいくん、朝だよ。おき——」

Tシャツを脱いで上半身裸になったところへ、ひょっこりふすまを開けて現れた悠と、見事なまでに目と目が合った。

「お、おはよう」

「は、はは……はうう」

ガラガラ、ピシャ。

「……おい、悠さんや」

「ひゃわあっ——きゃうあああ——」

と、呼んでみたが廊下を叫びながら行ってしまった悠に苦笑しつつ、このあとであき姉に絶対何か言われるなと考えながら着替えを済ませた。

案の定、居間まで行ったらあき姉に捕まってしまった。

それはもう見事なアームロックで首のうしろにふくよかな膨らみが押し付けられ、地獄へと逝って生還してきました。

「あだだっ……死ぬかと思った」

「いやー、ごめん。ちょっと手加減間違えちゃって」

ケラケラと笑うあき姉は悪びれた風もなく、麦茶を片手に朝ごはんを食っていた。俺に謝る態度じゃないし。

「んで、結局ユウに何をしたの？」

「だから何もしてないって」

「何もしてないのに、あんな暴漢に襲われて貞操の危機に陥った可憐な乙女の悲鳴が出るわけじゃないじゃないのっ」

そんな悲鳴だったのか、あれ。

「じゃあ、もしかして……コクったの？」

「ぐっ」

ど直球できたよ、この人。

「あら、凶星みたいね」

あの会話でここにいきつくとは思わなかった。

確かにいずれば気付かれると思ったが、もしかしたら今日は大丈夫かなって思ったのに。そうしたら、俺達は今日で最後だからそのまま帰れると思ったのに！

「ナオ、顔にしまくりだからね……明朝体でクツキリハツキリね」
俺、ワープロソフト内蔵じゃないし！

「まあ、それなら……なるほど、これも分かる気がするわ」

「……は、はは」

ニンマリと口の端を上げるあき姉が俺の額を小突き、俺はテーブルの上を見て嬉しいやら、恥ずかしいやら、複雑な気持ちを噛みしめながら苦笑していた。

テーブルの上にはいつも以上に豪勢な朝食の数々。

メインデッシュであろう焼き魚の他に、味噌汁、玉子焼き、納豆、漬物盛りまでは分かる。しかし、お刺身とサザエのつぼ焼きって何だよ？ おまけに、デザートの盛り合わせにはとっても高いマンゴーらしきものが見えるのですが、エンゲル係数高い食卓だな、こりや。

「お、お待たせ」

「やーっと、全部揃ったか」

「あーっ、もうー先に食べちゃ駄目って言ったのにつ」

台所からお鍋を持ってやってきた悠は俺と目が合うと恥ずかしそうにはにかみ、玉子焼きを三段刺しにした箸を持ち上げていたあき姉を一喝していた。

「だ、だって……ユウが用意するのが遅いから」

「もうっ、それはボクが用意しているのを邪魔するからだよ」

どうやら話を聞いていると、俺が起きる前から悠は質問攻撃を受けていたようで、それから逃げ出して俺のところへ来たはいいが、俺が着替えている場面に出くわしてしまった。というわけみたいだ。

「しかし、随分とかわいい声で悲鳴を上げもんだな、ユウは」

「そ、それはっ」

「ふふふっ……ナオは白状したから、ユウも大人しく白状しなさいって」

が、その瞬間悠の目が光った。

「なお君から無理やり聞き出したのっ？　もう、あき姉さんっ」

「い、いや、それは」

「あれだけ、なお君に変な事したら怒るって言ったのね？　忘れたのかな、あき姉さんは……それならー」

「ちょ、ちょっとーあ、いやー、ナオ助けてーっ」

ズルズルと悠に引きずられていくあき姉の涙声は聞かなかった事にして、隣の部屋から聞こえてきたあき姉の悲鳴に胸の前で十字を切った。だって、とっても言葉に出来ないほどのどす黒いオーラを纏った悠に声をかける事なんて出来ないですよ。

命は一個しかないのだから、大切にしないとね。

さて、慌しい朝のひとときはあき姉が泣きながら俺に抱きつき、どす黒いオーラを纏った悠を俺が宥める事で事なきをえた。というか、朝ご飯が食べれそうになかったので、俺から仲裁に入ったわけ

です。

で、現在は開店前の準備をしている最中で、俺は調理場の冷蔵庫と睨めっこしながら材料の確認をしていた。

「ご、ごめんね」

「まあ、気にするな。でも、中々男らしかったな」

「はうっ……も、もうっ」

アタフタしながらブンツと唸る拳は男のそれで、どうにも『遠慮』という言葉がなくなっているような気もしないが、とりあえずまだ根に持っているのは確かなのかも知れない。

「せっかく、なお君に食べてもらおうと作ったのに……もう、あき姉さんのほか」

ぷんぷんと口を尖らせてかわいいのだけど、微妙に目が怖いんですが。

「いいじゃないかよ。どうせ、いつかは言わないといけない事だし、あの人なら祝福してくれると思ったしな」

「そ、それはそうだけど……それでも、あんな、その……エッチな事言わなくても」

確かにその気持ちは分かるが、それはお前がいちいち面白い反応をするからだと思うぞ、悠。

朝の騒動を終えてご飯を食べ始めたのはいいが、俺の背中に隠れるようにしてご飯を食べるあき姉はここぞとばかりに悠へ質問をぶつけていたが、それがことごとくエロ話だったから悠は顔を真っ赤にしてご飯どころではなかった。まあ、エロ話には免疫がない悠には仕方ない事だと思うが、俺だって聞いているだけでも結構恥ずかしかったんだからな。あの人、自分の実体験を元に話すから勘弁して欲しかった。

「それに、なお君だって……エ、エッチな顔、してたもん」

「そ、そんな事ないぞっ」

俺はエロ話で顔を赤くする悠を愛でただけで……って、もしかして俺って最低？

「はいはい——無駄話はいいから、そろそろ開店準備急いで」

「ういーっす」

店先から調理場に顔を覗かせたあき姉が慌しく裏口まで走っていき、少ししてビールの入ったケースを持って帰ってきた。

「んじゃ、今日も頑張るかっ」

「うんっ」

楽しそうに微笑む悠がトレイを抱えて駆けて行こうとしたが、ふと足を止めてこちらを振り向いた。

「どうした？」

「え、えっと……」

頬をほのかに朱に染めて近寄ってきたかと思えば、少し背伸びをするように身体を預けてきた悠を受け止めたが、柔らかい感触に唇を塞がれてしまった。

「へへっ……いつてきます」

かわいらしく照れ笑いを浮かべた悠はさっきより赤くなった頬を手で擦り、そそくさと調理場をあとにしていき、残された俺は呆然として唇に触れていた。

「いらっしやいませー」

「いらっしやいませ。二名様ですね、こちらへどうぞ」

が、柔らかい唇の感触に浸っている間に店内は賑やかになり、カキ氷やジュースが飛ぶように売れていた。当然、開店直後では俺の出番はほとんどなく、暇なので裏からジュースの補充をするために倉庫を確認する。

「あき姉はビールだけは欠かさず補充するけどさ」

それ以外の補充はかなり大雑把だから、ときどき品切れを起こしてクレームの素を作りそうになるのだ。

「確か、昨日オレンジジュースが切れそうだって言っていたよな」
それを補充した形跡——空き箱——が見当たらず、棚に積まれて

いるオレンジジュースの箱を手にしようとしたところで、倉庫の扉が開いて誰かが入ってきた。

「あ、あれ——なお君」

「んあ？　なんだ、悠か」

入ってきたのは悠だった。

何やら急いでいるような、そうでもないような、今日は独特のテンポで動いている感がある悠は俺が手にしているものを見て驚いていた。

「うわー……なお君どうして分かったの？」

「やっぱり、これか。昨日の夜に少ないとは言ってたからな」

「それで覚えていたんだ。すごい、すごい」

パタパタと近寄ってきた悠は目を輝かせて俺を見上げ、その子供みたいな瞳に俺は自然と笑みがこみ上げていた。

「分かったから、行くぞ。二人してこんなところにいたら、あき姉に怒られちゃうぞ」

「そ、そうだね」

と、口では言ったが動こうとはせずに、上目遣いで俺を見つめて“何か”を催促してくる。

「早く行かないと、あき姉にお仕置きされちゃうぞ」

「わ、分かってるけど……」

こういうときの悠ってからかうと面白いのだが、今までは『幼なじみ』として見ていたが、今は俺達の関係はまったく違うものになった。そのため、この恥じ入る姿は理性を簡単に崩壊させるだけの破壊力を持ち、更に煩惱を刺激して止まない格好——キャミにショーパーン——という素肌曝け出しの“嫁入り前の娘が何て格好を”的な事を言いたいお父さんの気分も一緒に味わっている最中です。

で、更に疑問なのだが……悠ってどっちのパンツ穿いているのだろうか？ ショートパンツってかなり股上浅いし、男物なら絶対にはみ出すのはずなのに。謎だ。って、俺はナニを——違う、何を想像しているんだ！

「ねえ、なお君」

クイクイツと俺のシャツを引く悠は潤んだ瞳で上目遣い。そのま
まグツと身体を寄せて“おねだり”をしてくる。

「悠、遊んでいると本当に怒られるぞ」

「もう、分かって——んっ」

不意打ち成功。

「んっ……んちゅ、んっ……はふ」

さすがにやられっ放しでは男の沽券に関わるからな。

柔らかい唇の感触を堪能したい気持ちを静めながら、最後に唇を
啄ばんで名残惜しいが終了。

「えへへっ……なおくーん」

「こら、悠。遊んでいると怒られるって言ってるだろ」

公私混同はいけないと諭しつつも、何だかんだで俺もこの空気を
楽しんでいる。今まで我慢していたのだろう、悠の変化には少々戸
惑う部分もあるが、昔から元気が取り得だった悠を知っているのか
らこれが悠の“地”なのだ。

「ご、ごめん……で、でも、こうしていないと……その、全部が夢
じゃないかなって思っちゃって」

訂正。どうやら、染み付いた性格はそうそう変わるものではない
ようだ。

「その気持ちは分からんでもないが、俺は夢ではない事を知ってい
るぞ」

「……え？」

「目の前に悠がいる。そして、こうして触れる事も出来る」

「——んっ」

軽く、触れるだけの口付け。

ただそれだけなのに、愛しさが爆発したように胸の中を駆け巡る。

「さて、本当に急がないと——」

「う、うんっ」

真っ赤な顔で唇を押さえて一瞬キョトンとしていた悠だったが、

ぱあつと花が咲いたように笑顔となって俺の横について歩き出した。

……。

……。

本日はこの夏最高の気温を記録したとテレビで言っていたが、確かにうだるような暑さとはよくいったものだ。鉄板の前で走馬灯を何度か見た俺は、お手伝い部隊を連れてきたおばさんと交代して休憩をしていた。

「ふう……」

「なお君、大丈夫？」

心配そうに瞳を潤ませて顔を覗きこんでくる悠をポンポンと撫で、用意してくれた麦茶を一気に飲み干した。

「はい、どうぞ」

「サンキュ」

トポトポと注がれていく麦茶を眺めながらも、気付けば悠の事を目で追ってしまう。

どうにも悠の事を意識してしまい、それが気になって仕事にならないのも事実なのだが、何よりも悠が他の男と話しているのを見ると無性にイライラしてしまうのだ。

俺自身、これほどまでに独占欲が強かったのかと嫌になってしまったが、よく考えたら同性同士で話しているのだから気にする事はないのだが、見た目が完璧に美少女な悠ではそれすらも通用しない気がして、俺は悶々としている。

「なお君？」

「ん？ あ、ああ……大丈夫だ」

ぼんやりと考え事をしていたので悠が呼んでいる事に気付かず、生返事をしてそちらを向くと、むすっと頬を膨らませた悠が俺を睨んでいた。

「え、あ……」

「むーっ——なお君聞いてなかったでしょ」

言葉ではかなり怒っているのだが、ふわっと膝立ちになった悠が

俺を胸に抱きしめていた。

甘く優しい、心が落ち着く悠の“匂い”が鼻腔をくすぐり、疲れ
ていた身体に力がみなぎっていく感じがしていた。

「無理しちゃ駄目だよ」

「分かってる」

髪を撫でられる感触が心地よいのだが、くすぐったそうに身動き
する悠の胸が顔に擦れて妙な気分になりそうだった。

決して悠に胸があるわけでない。

だけど、何故かそこには柔らかい膨らみがあるような、女性的な
匂いがして俺の劣情を刺激していく。

押し倒してしまいたい。このまま、悠の身体を貪りたい。

最低だとは思うが、胸の奥が激しく震えて気付けば顔を上げて悠
の唇を求めている。

「——んっ、んんっ……ゆう」

「んっ……んんっ、はあ……な、なお……」

「ゆう、ちゅ……すきだ、っ」

最初は驚いて身体を硬直させていた悠も、閉ざっていて唇を開い
て俺の唇を啄ばむように、舌を受け入れていく。

俺の心は悠を深いところまで求めて離さない。

「な、なお……んっ、はんっ……ちゅ」

求め、求められ、唇を重ねる。

その繋がりがとても温かく、いつまでもこうしていいたいと思うが
現実 is 厳しいものだ。

「んっ、ふ……悠、そろそろ戻らないと——」

「はふっ……んにゃあ……にゃお、くーん」

が、やっぱり現実 is 厳しい。

蕩けきった悠が締めりのない顔で俺にもたれかかり、子猫のよう
にすり付いて頬ずりしてくる。

「ほら、行くぞって」

「うー……いきたくにゃい」

うわっ、駄目人間だ。すっかり駄目人間になっている。

「だってえ——なお君がいきなり、その……キス、なんてするから」
「悪かったって。あまりに悠がかわいかったから」

「あう……なお君の、ばかあ」

そういう俺も駄目人間まっしぐらだなと思いつながら、かわいく甘えてくる悠を抱と手をつなぎながら仕事へと戻った。

海の家アルバイト最終日は本当に平凡なまま終わりを告げ、俺と悠は帰り支度をしていた。

時刻は午後七時前。

八時一五分の電車で帰る予定になっているからまだ大丈夫だが、悠は悪戦苦闘しながらトランクの中身を詰めていた。

今日一日テンションが高すぎて血管が切れるんじゃないかと思っていたが、時間が経つにつれて落ち着きを取り戻していき、閉店する頃には“いつもの”の悠に戻っていた。

「何だか、荷物が増えてないか？」

「う、うん……あき姉さんが服をくれたから、んしょっ」

ギュッと押し込んでトランクを閉めようとするが、ボンッと音を立てて開き、何度目になるか分からない唸り声を上げて項垂れていた。

「あき姉も考えなしだからな。ここじゃなくて、家で渡せばいいのに」

「それ、ボクも言ったけど……『ここで渡すから面白い』って言われちゃったら、ね」

あき姉の理屈は分からないが、多分“楽しい”からに集約されている気がしてならない。悠と俺を“楽しませる”ために、自分が“楽しむ”ために、命をかけるような人だからな。

「しかし、面白半分で下着まで寄越すか、普通」

「い、一応、新品だって言っていたよ。これを着て、その……誘惑、

しろ……って」

誰をとほ言わないが俺を見て顔を真っ赤にしていれば、誰の事を言っているの分かるってものだ。そういう俺も顔が熱くなっていくのを止められず、思わずマジマジと下着の山を見つめてしまった。

「やー、もうっ——なお君のエッチ」

ガバツと身体で覆い隠して俺を睨む悠は本気で恥ずかしがっているようで、慌てた様子で鞆の中へと押し込んでいたが、ふと手を止めてチラツと盗み見るようにして俺の様子を伺っていた。

「いや、悪かったって。だから、そんな目で見ないでくれよ、頼むからさ」

何だか白い目で見られているようで。いや、実際見られているのだろうけど、悠にそんな目をされるのは勘弁して欲しいです。

「あ、えっと——ち、ちちち、違うのっ」

「いや、遠慮なしに見たのは悪かったって。ただ、まあ……」

これ穿いたときの悠を想像してしまったのは内緒だ。

「……エッチ」

なっ、顔に出ていたのか！

「で、でも……なお君は、あの、そのお……ど、どどど、どんなのが、えっと……す、好き、なの？」

「え、あつと……」

真っ赤な顔でワタワタしながら、悠は鞆の中から下着を取り出して次から次へと目の前で広げていき、先ほどより酷い状況になっていた。というか、投げ捨てるように出すものだから俺の頭にはパンツ。ブラがのっているのですが。大体、これ等がAカップブラであつても貧乳以前の問題だしな、悠の場合は。

「どれって聞かれてもな……」

さすがに落ち着かせるには答えるしかないと思いながら、散らばつた下着——主にパンツ——を見渡し、一枚を手にとって悠に渡す。

「これ……が、なお君」

「いや、それは俺じゃないぞ」

俺がパンツってどんなイジメだよ、それは。

一番シンプルで、一番悠のイメージにあったもの——赤いリボン付きピンクのパンツ——を選んだつもりだが、当の本人は大事そうにたたんで何故かポケットの中へ入れていた。

「えへへっ……なお君って、ピンクが好きなんだね——んにゃう」

恥ずかしそうに、何かを言いたそうな瞳を向けて微笑む悠の頭に軽くチョップを入れ、餞別としてもらった缶コーヒーを開けて一口。ほろ苦いビターな味が今の俺にはちょうどいい。

だって、この空間は甘くて蕩けそうな蜜の香りしかないのだから。

「それよりも、急いで片付けないと間に合わないぞ」

「あ、そうだった。はわわっ……んしょ、んしょ」

慌てて下着を片付け始めた悠を眺めつつ、俺は頭にとっていたパンツとブラを悠に渡して、俺は自分の荷物をチェックして入れ忘れがないかを確認して玄関先へと運び出す事にした。

……。

……。

それから二〇分ほどで悠も帰り支度が整い、あとは駅に向かうだけとなった。

「寂しくなるわね」

「別に帰ってもすぐ会えるくせに」

缶ビール片手に泣き真似をするあき姉は口を尖らせて俺の頭を一発叩き、「情緒が足りん」と吼えていたが、その言葉が適切なのかは微妙だと思う。

「それより、今年の後半組は大丈夫なの？」

「それなら、心配無用。毎年来ている子が捕まったし、おばさんも手伝えるって言っていたから」

「そっか。んじゃ、俺達はお役御免だな」

クスッと笑うあき姉はにゅふっと笑みをもらしたかと思えば、いきなり俺に抱きつき、隣で悠が声にならない悲鳴を上げて俺の腕にしがみ付いていた。

「ありがとうね。ユウも――」

が、俺から名残惜しそうに離れて悠を抱きしめ、優しく背中を撫でるあき姉はとても優しいお姉さんの顔をして、対照的に鼻をぐしゅぐしゅさせて悠は泣きそうな顔をしていた。

「あらら、いくつになってユウは泣き虫なんだから」

「だ、だって……」

「せっかくのかわいい顔が泣いたら台無しでしょ」

まあ、あき姉が悠を泣かせようとしたのは俺にも分かるが、さっきまで平気そうだったのに自分が泣きそうになったのは予想外だったのか、バツの悪そうな顔で俺を見て苦笑していた。

……これも、いつも通りか。

毎年、このやり取りをしているのにいつも今年はどこか新鮮に感じるのは、やっぱり“違う”部分があるからかも知れない。

「ほら、泣き止めって」

「だ、だって……っ……あき姉さんが」

俺の胸にしがみつく悠を宥めながら、少し涙目になっているあき姉に“大事にしないさいよ”と指さされ、俺は苦笑しつつもしっかり頷き返すと嬉しそうに微笑んでいた。

「んじゃ、俺達は一足先に帰るよ」

「はい、お疲れ様。来年もよろしくね」

「来年って、一応は俺達受験生なんだけど」

「あら、そうだったわね。まあ、それでも息抜きは必要でしょ」

あくまでマイペース。

笑顔のあき姉に見送られ、俺達の慌しくも思い出がいっぱい出来た『アクアマリン』でのバイトは、終わりを告げた。

それから、それから……。

夏休みは半分が過ぎても、夏はこれから――。

ましてや、俺と悠の夏休みはこれから始まるのだ。毎日が楽しい思い出となっていく……はずだったのに、現実には甘くない。

「だーっ、終わんねえ」

「もう、なお君」

テーブルに突っ伏した俺を呆れた顔で見つめる悠は、俺の手元を覗き込んで「しょうがないなあ」とシャーペンを走らせていく。

俺達は現在、我が家にて夏休みの宿題を片付けている最中である。アルバイト終了から数日。悠と遊びに行く計画をしていたのが宿題を終わらせてからという話になり、二人で頑張って半分は終わった。が、残り半分が面倒な教科ばかりで俺はもう精根尽き果てていた。

「悠、俺はもう駄目だ……エネルギーが切れた」

「はあ……遊んでいたら、どこにも行けなくなっちゃうよ」

「分かっているが、俺は根を詰めると頭がパンクする仕様になっているのだ」

どんな仕様かと聞かれた困るが、再度呆れたため息交じりの吐息が聞こえ、がさごそと衣擦れがする音が畳の上を滑って近寄ってくる。

「なーお、くん」

不意に名前が呼ばれて顔を上げると、柔らかい感触に唇を塞がれていた。

「んっ……はむっ、ん……っ……どう、なお……く、んっ」

触れ合う唇から漏れ熱い吐息が全身を駆け巡り、唇を割って入ってきた舌先を啄ばむように、愛しい気持ちを込めて舌を絡めていく。

「んちゅ……はふ、ちゅ……なお、く、んんっ」

気付けば悠を押し倒して覆い被さっていた俺は、悠の身体を抱きしめていた。

「はあ、はあ……なお、くん」

「んっ……すまん。つい夢中になって」

甘く夢を見るような瞳を俺に向けて微笑む悠から俺は目が離せなくなっていた。

……綺麗だ。

上気した朱色に染まる頬、柔らかく触れただけで身体が蕩けてしまいそうになる唇。今の悠は妖艶で性別を超えた淫靡な香りがして、俺の中に眠る“野獣”が目を覚ましそうになっている。

大体、今日は悠が来たときから俺の“野獣”はウズウズとしていたのだ。

それは何故か？ 答えは簡単だ。

悠が真っ白清楚なワンピースを着ているからだ！ しかも、女の子の下着——ブラなしでパンツのみ——を丁寧に着用していると恥ずかしそうに言われたら、男なら行くしかないだろう！

だが、言っておく。これは俺が無理強いをしているわけではない。そもそも、アルバイトから帰ってきた翌日、悠が俺の家に来たときはキャミソールにフレアのミニスカートで、俺が我が目を疑った。これが本当に悠なのかと思いつながら、わけを聞いてみたら子供の頃からおばさんの趣味の一環として、家の中では時々女装をさせられていたらしく、これを期に俺にも見て欲しかったらしい。無論、その姿に惚れ直したのは言うまでもなく、それからは毎日のように俺のためにオシヤレをしてくるようになったが、そのおかげで俺の理性は日に日に磨り減っているわけです。

「もっ……と、んっ……もっと、んちゅ」

と、回想をしている間に、どうやら悠の方もスイッチが入ってしまったようで、俺の首に腕を回して唇を重ねてくる。

「こ、こら……ゆ、ゆう——べんきよ、んっ……するんじゃ」

「もう、はむっ……いまは、んっ……きゅうけい」

休憩は二〇分ほど前にした記憶があるのだが。

まあ、こんな感じで俺達の勉強会はまったりと進行中だったりする。

……。

……。

それから一時間ほど経過して、本日のノルマは終了。

「あうう……またやつちやたよー」

一人落ち込む悠は部屋の隅で膝を抱え、先ほどの乱れっぷりを反省していた。

どうやら、悠はキスをするとう興奮して理性を飛ばしてしまうみたいで、我に返ったあとはこうして一人反省会をしているのだ。その姿もかわいいから暫く眺めていてもいいのだが、ほっておくとネガティブオーラを振りまいて大変な事になるからな。

「ほら、いじけてないで晩飯の準備するぞ」

「いじけてないもん……なお君のいじわ——ひにゃっ」

すっかりいじけているようにしか見えないのだが、体育座りをする悠をうしろから抱っこするように膝裏と脇の下に手を差し入れ、一気に立ち上がる。

「さて、行くか」

「うにゃあ——も、もうっ、なおくんのほかあ」

これ以上ないくらい真っ赤な顔で恥ずかしそうに、俺の腕に頬をすり付けて子猫のように甘えてくる悠に、俺は幸せな気持ちを胸にゆっくりとキッチンへと向かった。

キッチンから聞こえるハミングに合いの手を入れながら、俺はリビングで暇を持て余していた。

「なあ、悠」

「なあに？」

「俺も手伝う事ないか？」

「大丈夫だよ。なお君はゆっくりしてて」

上機嫌な悠の声を聞きながらこっそりとため息を吐き、ソファの上で餌をおあずけされた犬のように、ジーツとキッチンの方を見つめる俺は寂しいヤツではないぞ。

俺だって何度も手伝うって言ったんだ。

でも、悠が『今日は入ってきちゃだめ』って言うんだ。俺を除け者にして何をやっているのか知らないが、目からしよっぱいものが勝手に溢れてきちゃうんだぞ。ちくしょう、一人は寂しいよ。

「なお君、どうしたっ？」

「……んあ？」

ぼんやりとキッチンを見ていたはずなのに、気付けば目の前に悠が立っていた。

「何だか元気がないけど、どこか痛いのか？」

「いや、なんだ……一人は寂しいなって思ってな」

「そ、それは……ボクだって寂しいもん」

シュンツと眉尻を下げて困惑する悠の前に立ち、今にも泣き出しそうな悠の髪を撫でてそっと抱きしめていく。

「ごめんね、なお君」

「いや、俺の方こそ邪魔しちゃってごめんな」

ちよつと拗ねてしまった自分が情けないと思いながら、ぐしゅつと鼻を鳴らす悠に申し訳なくて優しく髪に口付けをする。

「ううん——明日のために準備しようと思ってたんだけど、なお君を一人にしちゃって」

と、そこまで言われて俺はある事を思い出した。

「そっか。明日って、俺の誕生日だっけ」

「……………もしかして、忘れてたの？」

「あ、いや」

間拔けな俺の声に、心底呆れた様子の悠がジト目で俺を睨んでい

たが、誕生日よりもサプライズな事があったから忘れていたんだ。

「忘れたっていうか、それ以上に幸せだったから……な」

「……あうっ」

ただ、言葉にするのは照れ臭くてハッキリと言えなくても悠には伝わったらしく、ポンッと顔を赤くして俺を見上げて照れ臭そうに笑い、俺達はどちらともなく声を上げて笑っていた。

「ねえ、なお君」

「なんだ？」

「明日の準備、やっぱり手伝って——ううん、一緒にしてくれる？」

「ああ、一緒にしよう」

クルクルと変わる悠の表情を眺めつつ、自然に笑みがこぼれていく俺は悠と一緒にキッチンへと歩いていく。

「そうだ。なお君の大好きなほくほくじゃがいものコロツケ作ってあげる」

「おっ、いいね。んじゃ、俺はじゃがいもの皮むきでもするかな」
何気ない会話がとても楽しく、何気ない仕草がとても愛しい。

「そ、その前に……あの、えっと」

「そうだな。悠に寂しい思いをさせてしまったから——んっ」
モジモジと指を付き合わせ、恥ずかしそうに上目遣いで訴えてくる悠の顎に手を添え、自分でも適当な理由だと苦笑しながら、優しく思いを込めて唇を重ねていく。

「んちゅ……なお、く……だいです、き……大好き、だよ——んっ」

「俺も、んっ……大好き、だ、ちゅぷっ」

今、この瞬間が幸せで、愛で満ち溢れている。

「んっ——元気もらっちゃった」

「元気吸われちゃったかも」

ただ、隣にいる幸せを、二人で感じながら。

「もう、ちゃんとボクからもいっぱいあげたもんっ」

「ああ、そうだな。んじゃ、頑張って用意するか」

ただ、そばにいる幸せを、二人で分かち合いながら。

「うん。でも、その前にご飯食べよう——なお君お腹空いたでしょ」
「確かに。んじゃ、先に飯にするか」

ただ、この幸せな時間を、二人で共に過ごしながら。

「今日は、なお君の好きな煮込みハンバーグだよ」

「さっきからいい匂いがしているとと思ったら、やっぱりそうか」

そこにある幸せを大切に思う気持ちがあれば、幸せは“そこ”に存在するはずだから。

「ほら、早く。今日は食べさせてあげるね。『あーんして』ってね、ふふっ」

「い、いいって。いや、だから——ちよっ、引っ張るなって」

いつまでも一緒に——それは『幼なじみ』から『恋人』になったとしても、俺が『悠』を思う気持ちだけは何があっても変わらない。

……愛してるよ、悠。

だって、それが俺の『理屈』抜きの悠への思いだから——これだけ理屈ではないのだ。

第七話…これからは、二人で手を繋ぎ……。 (後書き)

最後までご拝読ありがとうございました。

今回で一応は最終話という事になりますが、二人の話はまだ続きます。この先の話も予定はしていますが、それはもう少し先になると思います。

まあ、短編では書いた事があるBL作品ですが連載で書く結構しんどかったです。私のくどい文章で見苦しい点もあったかとは思いますが、この作品を読んでいただいた皆様に感謝いたします。

それでは、また別のお話でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1273i/>

なおtoゆう

2011年1月17日13時10分発行